

モンハンのゴア娘の
フィギュアがリアル美
少女になってた【完結】

屍モドキ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

平凡な日々を過ごす主人公。

そんな彼の目の前に現れたゴア・マガラの少女。

出会い頭に追い掛け回され追い詰められた主人公は一体どうなってしまうのか!?

「そんな前置きいいでしょう?」

「あ、ちよ、急に出てこないで」

「いいから、ほら」

「アッーアッー」

目次

出会いというのは唐突に	1
2話 遅いご飯は簡素な物	10
3話 露骨なお風呂回	18
4話 私の名前は	37
5話 見逃したのは不安の種	54
6話 変わっていく彼女	63
7話 思わぬ行先	73
8話 帰る場所	86
エピソード	116
番外編	
リアル季節番外編 慣れないイタズラ	

IFな番外 夏のビーチに黒蝕竜姫	122
127 おまけ 設定とか没案とか諸々	
147 番外編 黒蝕竜姫に嘘ついてみたかつ	
た	
161 番外編 レシカとポツキーゲーム	155

出会いというのは唐突に

その日、何事もなくただ漠然と生きてきた俺の人生はガラリと色を変えた。
いい色かなんてそんなのは知らない。

ただモノクロの世界しかなかった時代に初めてカラーテレビが登場したときのような衝撃が俺の身体中を駆け巡った。

その娘は真つ黒な少女だった。

美しい流れるような黒髪、憂いに満ちた紅い釣り目、病的なまでに色白な肌、折れてしまふようなほど華奢でか細い腕、ゴシック&ロリータが入った貴婦人のようなドレスと同じく、真つ黒な日傘を慎ましやかに持ちながらただじつと俺のほうを見ている。

「あら、こんなこともあるのね……」

何か呟いたぞ。ゴスロリがなんかそれっぽいこと呟きながら俺を見ている。

いやホントに俺か？　もしかしたら俺の後ろになにか凄いものとか珍しいものでもあるんじゃないか？

そうに違いない、そうじゃなければこんなにもこの少女が穴が開きそうなほどこんな平凡な俺を凝視するはずがない。

よし、帰ろう。

いいもの見たなー、とか思いながらやつと首が動いたのでそつと帰路につこうと思つて踵を返すと。

ガシッ！ と。

何か妙な肌触りのするものに腕を掴まれた。

「待ちなさい」

そう言われれば仕方ない。

恐る恐る振り返ると、先ほどゴスロリ衣装を着ていた少女のスカート部分に変形、と言いかもはや原型も留めず全く別の物体になっていた。

見たところ怪物の腕か、奇怪な形をしている。太く、それに見合ったサイズで細長く、付け根から手の側面まで翼膜のようなものがちらちらと見える。

指は四本で、五本目は翼と一体になっていると思われる。

そんな怪奇な剛腕を腰から生やした少女が俺を見つめながら口端を引き裂くように吊り上がった笑顔を向けてきた。

正直悪寒が走った。

なんだコレ、俺食われるの？ もしくは殺されるの？ あ、でもこんなキレイな女の子に殺られるなら本望かなーなんて。

「ほほう、考えたわね」

「っ！ っ！」

あの女の視界から外れたと思われるところで小さな遮蔽物の陰に隠れ、諦めてくれるかそのまま遠ざかってくれることを祈る。

「邪魔の物があつて入れないなら無くせばいい話でしょう？」

少女のスカートから変異した剛腕が少女が一撫でした途端に黒い霧のようになって拡散し消えた。

獯猛に、しかし上品な笑みを絶やさず少女はゆつくりと路地に入ってしまった。

「隠れても無駄よオ？」

カチューシャの中央で交差するように添えられていた角が隆起し、紫色の燐光を灯す。

剛腕が変異した霧が辺りに散布され、やがて男のいるところまで霧が漂ってきた。

「そこね？」

「ッ!？」

何か言っている。もしかして気付かれた？ まさか、視界からは逃れたはず、なのにどうしてこうも速く見つかったのか？

考えている時間はない。

物音を立てず慎重にその場から離れる。

現状が全く分かんないし追われてる理由も分からない。

けど捕まったら確実に命が危なそうな気がする。

「何処へ行っても無駄」

ロングブーツの形状が変化し、禍々しい甲冑のようになり、二の腕まである手袋も怪物の腕のような見た目になり、その掌は元の手より三倍ほどにもなっている。

「私にはアナタの居場所がしっかり見えているのよ?」

全身の衣服や鎧に走っている紫色の装飾が薄っすら光り、持っていた傘を上下逆さまに持つと、傘の帆が柄だったところに移動して傘はモーニングハンマーのような形状に変わった。

「あまりおいたが過ぎるなら……」

ハンマーを振りかざし、アスファルトにぶつける。

アスファルトは碎けて破片が飛び散る。

「アナタにもこんなことしちゃうかも・・・・・・フフッ」

物陰から彼女の行動を覗いていたが、ヤバイ匂いしかない。

しかしあの恰好及びあの見た目、モンハンのゴア・マガラに似てる気がする。

そういうや以前ホビーショップであんな恰好をした美少女フィギュアを買ったよう
な・・・・・・。

あ、買ったわ。

ちよつと気になってレジに置いたら一万と少しと言われて泣く泣く買ったわ。

ギミックはある程度遊んでパッケージイラストのポーズと同じポーズで飾ってたわ。

もしかしてアレがああの娘!?

なわけないだろ。

そんなメルヘンやSFじゃねえんだからそんなことあるはずない。

前言撤回さっきの変態シーン見てそんな考え吹き飛びました。

どうしよう、素直に出たほうがいい気がする。

けどそのままぶちつと殺られそうだしなあ・・・・・・。

どうする、俺。

素直に出ていくのか、それとも逃げるのか・・・・・・。

「見イ〜つけたア〜．．．．．」

「!？」

ぬるりと顔を覗かせて、笑みを浮かべながらこちらに視線を向ける少女。

やっべえ。見つかった。死ぬ。

殺される！ と思った俺は顔を伏せ蹲る。

「え、ちよ、そんなに怯えなくてもいいのに．．．．．」

「へ．．．．．?？」

少女は少し引き気味に俺のを見ている。

なんでそんな目で見てるんだ、こちとら生死の境目で反復横跳びしてたと言うのに。

「ちよつとアナタを驚かせようとしただけなのに．．．．．」

「ごめん、現状がまったく理解できてないんだけど」

その後、しっかりと説明を受けたが漠然としか分からなかった。

「つまり、気が付いたら自我持ってて動けるしちよつとしたサプライズ的な好奇心と悪戯心で俺を驚かそうとそたら思いのほか俺がビビるから調子に乗ってそのまま続行してたと」

「なに、そのすつごい説明口長なの」

うん、全く分からん。

ジャガーみたいなセリフが出てしまったが本当に理解できないんだもの。

「まずファイギュアが人になるってどういうことだっつてばよ」

「そんなこと言われても私だっつて知らないわよ」

そらそうだ。聞いた限りじゃあ気が付いたら動けたと言っているのだからそんなことと彼女が知るはずもない。

「じゃあ、俺もう帰っていい？」

「なら私も着いていくわ」

「なんでさ」

「アナタは私のご主人様と言える人だもの」

「ええ………」

しかし考えてみればそうなのか？

俺が購入したファイギュアが動き出したのなら俺が主と言っても過言ではない……。

ダメだ、わけがわからないよ。

「もう好きにしてくれ、腹減って仕方ねえんだよ……」
「ちゃんと着いていくわ。ご主人様♪」

かくして、俺の妙な日々が始まった。

2話 遅いご飯は簡素な物

「もしも先程まで狂喜の笑顔浮かべながら遊び半分で殺りにきていた人物を自分の住居に上かららせるだろうか。」

「お夕飯はどうするの？」

「なんで着いてきたの？」

「アナタは私のご主人様なんだから」

「ごめんよくわかんない」

あの後なんやかんやあつてあの娘をウチに連れてきてしまった。
ていうかあの娘が自発的に着いてきた。

「賃貸だから壁に傷とかつけんよ」

「言われなくてもそんな粗相しないから安心してちょうだい」

「どうだか……」

自信満々に胸を張って言い張っているがどうだろうか。

張っても少しだけじゃんとかは言わない。

「今失礼なコト考えたでしょ」

「全然」

何故ばれたし。

それはさておき遅めの夕飯の準備をする。

と言つても今から料理をしようとも思わなかつたのでインスタントで済ませよう。

俺は台所のインスタント食品のストックから二つのカップ麺を取り出してきてビールを破いて蓋をあげ、ポットでお湯を注いでまた蓋をする。

「まだ出来ないのー?」

「まだだよ、あと三分で出来るから待ってて」

「じゃあ此処で暇つぶしさせてもらうわ」

「自由」

暇そうに足をパタパタと泳がせて寛いでいるこの少女。

改めて見るととても整った顔立ちをしている。少し釣り目で瞼は二重、紅色の瞳はずっと見ているとなんだか引き込まれそうになるほど魅力的だ。

頭には細長い角のようなものが二本前で交差しているようなヘアバンドだかチューシャだかをしていて髪は漆黒の長髪で、今は前髪で右側の目が隠れている。

首元にフリルのような飾り物を巻いており、服装は紫色のラインが通っていてドクロの意匠が特徴的な黒いミニワンピース。腕には紫色のリボンがあしらわれている二の

腕まである手袋がはめられていたが今は脱ぎ捨てられている。

同じように外で履いていたロングブーツも玄関口でへ垂れていて今彼女は裸足だ。

「なあに？ ヒトの事をそんなにジロジロ見て」

「いや、可愛いのかキレイなのか分からねえなあ、と思って」

「なツ!? ななな、なかなか嬉しいこと言ってくれるじゃない……」

何故か彼女は顔を赤らめてそっぽを向いてしまった。

ちよつと耳まで赤いのは大げさではないだろうか。

そうこうしていたら三分が経過した。

「ん、もう出来たかな」

「あら、やっと出来たのね」

俺は箸を取ってきたがこの娘は箸が使えるかどうか怪しかったのでフォークを手渡す。

「はい、これ食ったら帰れよ」

「帰れって言われてもねえ……」

「どうしたんだよ」

「何でもないわよ」

少しバツが悪そうな表情を浮かべカップ麺の蓋を剥がすが、その中身を見た途端に表

情が変わった。

そんなこといいでしょ、と吐き捨てて容器に注目する。

「へえ、美味しそうね、さて味のほうは……」

「あ、冷まさないで食うと……」

珍しそうに一口分すくっておもむろに口に運んだ少女。

だが。

「あづツ!!?」

「あぁー」

すぐに容器を口から離してカップをテーブルに置いてエビ反りになりながらごろごろとのた打ち回って悶絶しました。

え、そんなに……?」

「な、なんへものはべはへうのよつ!!」
なんでもの食べさせるのよ

「いや冷まさないと言って言おうとしたら食べたから」

出してあつた飲み物をチビチビ飲みながら抗議の目をぶつけてくるが、俺はあまり悪くないと思う。

しかしコイツかなりの猫舌だぞ。

先ほどのあのちよつとで今の反応なのだからよほどだろう。

「ホント最悪だわ……」

「ちよつと冷まして食えよ」

「食べさせたのはアナタでしょ!？」

逆ギレされた。

いや、逆ギレなのか分からんがキレられた。

ちよつと面倒くさくなってきたな……とか思ってたら彼女はカップを俺に手渡した。

「なんだ、返品か？ まあ流石に無理に食わせることもしないからいいけど」

「違う、そうじゃないわよ」

不貞腐れながら俺の予想を否定する。

では何だろうか。

頬をほんのり紅く染め、口籠りながら続ける。

「その、アナタが冷まして私に食べさせて」

「んー、まあそれぐらいならいいけど」

自分で冷ましたほうが温度調整出来るから良いと思うのだが、それを言うともた怒られそうなので控えておこう。

俺は彼女から渡されたカップから一口分掬って息を掛けて熱を取る。

ある程度冷ましたところで彼女に向けてフォークを向けると、彼女はあーんと口を開けて待っていた。

「ほれ」

「あー、ん」

少しの租借の後んく、と飲み込んで訝しげな表情は変わりばあ、と明るい顔に変わった。

すぐさま俺からカップをひったくりさつき俺がやってやったように一口掬ってふうふうと冷まして食べる。

「んー！ 美味しい！」

「そうかそうか、良かった良かった」

なんとか機嫌を直してもらえてよかった。

さて俺も自分も分を食べよう。のびてしまう。

．．．．．

．．．．．

．．．

「(ぎ)馳走様」

「(ぎ)っそうさん」

空の容器が二つ、卓上に並び立つ。

俺としては腹八分かそれ以下だが寝るには丁度いいぐらいの満腹感だ。

視線を横に向けて少女に目をやると恍惚の表情を浮かべていた。

「美味しかった……」

「ご感想が零れている。」

たかだかインスタント食品にここまで感動を覚えることがあっただろうか。

しかしこの娘にとってはそれほどだったのだろうか、うむ、わからん。

「よし。飯も食ったし、俺は風呂入って寝るからお前は帰れ」

「ああ、そのことなただけど」

「なんだ？」

ちよつとアレ見て、と少女が指差すのは俺がフィギュア等を飾っている棚のところ。

よく見て、と言うのだから目を凝らすと、ゴア娘のフィギュアが消えていた。

「な、え、ちよ、嘘オ!!」

思わず駆け寄って辺りを探すがどこにも見当たらない。

本体も台座も武器も装飾品も何もかもゴア娘の存在だけがキレイさっぱり消えていた。

振り返ると澄まし顔で鎮座する消えたゴア娘のフィギュアに似ている少女。

まさかと思っていたがずっと否定していた事が、本当の事になって俺の目の前で起きていた。

「まさか、此処にいた俺のゴア娘さん……?」

少女はニコリと微笑んで肯定を示す。

「ええ、そうよ。私はつい昨日までそこに居たアナタの大事な大事なゴア娘ちゃんよ」

認めたくなかった事実というだけあって、突きつけられた時の絶望感に似た何かに襲われ膝から崩れ落ちた。

3話 露骨なお風呂回

夕食を食べ終え風呂の準備をする。

と言つても浴槽に湯を溜めるなんてことはしていないのでいつもシャワーで済ましている。

が、今日はお湯を溜めようかどうか悩んでいる。

その原因は……。

「ん？ なぁに？」

コイツだ。

名も知らぬ謎の少女。

人かどうか怪しい美少女ツ！

この娘が風呂に入るかどうか、と言うなら恐らく入るだろう。人の形だし、なんかお貴い雰囲気だし。

問題は湯船に浸かるかどうかだ。

「なぁ、お前風呂入るの？」

「なっ……失礼ね！ 入るわよっ!!」

赤面しつつキレ気味に言い張る。

しかし彼女から風呂に入るといふ情報を得られたので俺も気兼ねなく風呂に入れる。なら今日はお湯を張ろう。

彼女の暮らしは知らんがあつて損は無いだらう。

俺も暫く湯船に浸かつてなかつたらしい機会だ、今日は疲れが溜まつてるからゆっくり温まつてじつくり寝よう。そうしよう。

「先入るか?」

「あら、一緒に入らないの?」

テレビを見ていた彼女は横目でからかうような目をしながらそう言う。

「冗談はほどほどにしてくれ……」

「そう、残念ね」

「……………」

しれつと言っているが耳まで赤くなっている。

恥ずかしいなら言わなけりやいいのに。

しかしそれでもやってやったと言わんばかりのドヤ顔でテレビを視聴しているのでタオルと俺の私服を用意してやり風呂に入れるようにしておく。

「よし、そろそろ沸いたかな。一番風呂はやるから先に入れ」

「じゃあ、そうさせてもらおうわ」

テレビを消して浴室に向かう。

手に持っていたコーヒーマグの口を口に運んでひと啜りして天井を見上げる。

「ほんと、どうしようかなあ……」

居候が出来るのはいいが身寄りもない人としての存在も怪しい戸籍は恐らく存在しない。

そんな生物を自宅に置いておくというのは少しばかり不安があるのは確かだ。正直匿いたくない。

でも彼女は俺のことをご主人様と呼び、俺に従っている、と思われる。

何故か妙に上から視線だし力は強いし主従を決めておくせしてなんか上げ足でも取ろうとしてくるし、何がしたいのか正直分からない。

「まあ、飽きないからいつか」

「あつつつづうういいいいいい!!!」

物思いにふけっていると浴室の扉を乱暴に開いて一糸まとわぬ姿で飛び出してきた少女がきた。

「な、え、ちよ、何か着ろつて!」

「うるさい、なあによあのお風呂! 熱すぎでしょ! わたしをお湯で殺す気い!」

「だから服着ろって！」

そんなに熱かったのだろうか、てかバスタオル巻くだけでもいいから早く隠してほしい。現在進行形で目のやり場にメチャクチャ困っている。隠してくださいお願いします。

「なんであんなに熱くしてんのよ！」

「熱いつて、40度ぐらいだぞ？」

「十分熱いわよ!!」

そんなになのか。そういやさつきもカップ麺食べて火傷してたな。猫舌なうえ熱に弱い、か。原作リスペクトなのかただただ本当に熱いのが苦手なのか、恐らく両方か、どちらにせよ風呂に水を足してやろう。このまま吠えられ続けるのは耳と目と理性に悪い。

先ほどから彼女の小振りなパイが揺れるとまではしていないが視界にチラついて仕方ない。てか近い。

「早く隠して………」

「隠せつて、なに、を………」

俺の言葉がやつと耳に入り少し冷静になった彼女は自分の体に目線を落とすし、そのまま睨んでいたジト目はゆっくりと見開かれ顔は赤くなったり青くなったり忙しなく変

「湯加減よろしーでしょーかー」

「もう少し水足して」

「ほーい」

蛇口をひねり浴槽に水を足す。

そこそこ入れて俺の体感としては結構温度が落ちたとは思う。もうぬるま湯ぐらいだ。

「ん、いい感じだわ、ありがとう」

「へいどーも」

じゃあ俺も出ようとしたところで肩を掴まれ足を止める。

ちよつと振り向いてみると彼女は怪腕を展開して俺の肩を掴んでいた。

「その、もう二人ともお風呂の中に居ることだし、もうアナタも入りなさいよ……」
「……………」

一瞬断ろうかとも思ったがここで断るのも何かあとで変な空気になりそうだったので素直に彼女の言葉に従うことにする。

「そうさせてもらおうよ」

一回脱衣所に出て上下の服を脱ぎ、タオルで腰を隠して再び浴室に入る。

シャワーを出してさっさと体を流し、そも当然のように出ようとしたらまたも肩を掴

まれた。

「……………なんでそうすぐ出ようとするのか」

「いやだって、なんか恥ずかしいし……………」

「わ、私だつて見られて恥ずかしい思いしたんだから、アナタも我慢しなさいよ！」

「んなこと言われても……………」

大分パワハラ発言だが言ってるほうの身長がなかなか小さいためそんな迫力がない。てか自分でも恥ずかしいこと言ってる自覚はあるようでお顔が真っ赤になっている。そんなに恥ずかしいなら言わなきゃいいのに。

「……………分かった、俺も浴槽に入れさせてもらおうか」

「へ、あ、そ、そうよね！ やっぱりそうなるよね！」

なんでキョドるのか、恥ずかしいなら（ry

そんなわけで俺の足の間に入るようにして少女と一緒に浴槽に入る。

何でこうなった。

「……………」

「……………」

お互い無言で密着したままの状態にいるのはなかなか精神的に辛いな。しかも裸で。

なんでこうなったんだろう、と考えるも命が惜しいのと女性のお誘いは断るわけには
いかないという謎の使命感に駆られたからである。

決して邪な感情は持ち合わせていない。絶対に。傍から見ればアウトだろうけども。

「なあ」

「なあに？」

声をかけると顔だけ横に向けて目を向けて返事をする少女。

髪は濡れていてより流麗な艶を出し、肌は湯に浸かったからからか少し血色が良くな
り、体の節々で少し赤みを帯びている。汗か滴か、水滴が肌を伝う様は見た目的にまだ
幼さを残しているが妖艶な雰囲気醸し出していた。

「君は、何者なんだ？」

「似たようなことさつきも聞いたわよね？ アナタの大事なゴア娘ちゃんよ」

「いや、そうじゃなくてね……」

「なによ」

何と言えがいいのか、なんて質問すれば良いのかわからない。

この娘の正体と言うのはさつき飯を食っている時におおよそ見当はついた。

じゃあこの娘は人間かどうか、と言うことが知りたいが、ド直球に聞くのも憚はばられる
内容だ。どうやってさり気なく、より柔らかく伝えるかが問題だ。

「もしかして私の種族とかについて？」

「………ご名答」

ばっちり当てられてしまった。顔にでも出ていたのだろうか。だとしたら自分は隠し事が下手だな。

「そうね……能力こそ使えるけど、色んな構造的には、その、アナタと愛し合うことだつてちゃんんと出来るわよ」

「あ、そうなんだ」

「反応薄いわね………」

「なんて返せばいいのか分かんなくて」

「そう」

いやホントになんて返せばいいんだよ！

要は超人で亜人的なものに分類されるけど一応人間の分類には入るから交配も出来るってこと？

なにそれロマン。

しかしこの状況が起きているのは俺だけなのだろうか？

もしかすれば他にも擬人化とかさういったものがあるからリアルに出てきたりしているのではないのか？

なんか得も言えない不安感が沸いてきてしまった。

と、どうしようもない妄想やら想像やらに頭を使っていると突然彼女が俺に体重をかけながらもたれかかってきた。

受け止めてなおぐぐいと踏ん張るようにして体を密着させてくるので思わず腕を湯船から出して肩を持って抑制する。

「んんー」

「ど、どうしたの………?」

「アナタが勝手に悩んでるからよ」

彼女は不満げに頬を膨らませながら少しジト目で睨みつつ、体の向きを変えて俺と正面に向かうように体制を変えてきた。

ちよ、いろいろ見えちゃう、危ないから、出会って一日もたたずにこんな至近距離とか密着とかイロイロキケンだからあ!!

現に今目の前に血色の良くなった色白の肌とか艶やかな長い黒髪とか少しキツめの紅い釣り目とか桜色とかに目が行ってしまい俺の脈拍がトツプギアなんですけど。

デッドヒートなんですけど!!

「ホント、何に怯えて悩んでるのか知らないけど、そういうのやめなさい」

「へ?」

俺の膝の上に馬乗りになるような体勢で、彼女は細い腕を伸ばして俺の肩を押さえながら両手で俺の頭を挟み、目線を固定して言葉を続けて放つ。

「私はアナタが好きなの、私を買ってくれたことから始まって今まで、汚れがついたら拭いてくれたしすっかり遊んでくれた。ギミックだつてちゃんと全部使ってくれたし変に改造したりとかしないし負荷かけないし塗装剥げする前にポーズ変えたり変形を起さないような無理のない姿勢で置いてくれたりしてる優しいアナタが好きなの」

「……………」

一気に寝められてちよつと理解が出来なかつた。

どれもフィギュアだったころの記憶のようだがそんなところまで覚えているものなのだろうか？ だとしたらかなり恥ずかしいこともあるだがそれも覚えているということになる。止めてくれ、今のだけでもかなりこつぱずかしいのに！

「スカートの中覗くとか、ちよつとスケベなところもあるけど……………それでも私はアナタが好きなの！」

「やっぱりかあ！ いっそ殺してくれッ!!」

言つてほしくなかつたことを顔を赤らめながら言われてしまった。

手で顔を覆い少女に羞恥心を煽られるというかなり悲惨な状況に死にたくなつた。

いっそあの怪腕で俺を捻りつぶしてくれ……………。

めめめそしてしていると、だからね、と続けて話をするので涙を意地で堪えて顔をあげる。「だから、こうやってアナタと同じ人間に、生き物に、自由に動ける体になって嬉しかった。アナタと一緒に過ごせる体になってとつても嬉しかったの……!」

「……………」

しつかりと俺を見つめ、己の感情を吐露した彼女の紅い瞳には薄っすらと涙が溜まっていた。

顔もさつきより赤くなって、赤く……あれ、赤過ぎやしないか？

「きゆう……………」

「うおおおい!」

あらぬ方を向いて少女が倒れ掛かってきた。

恐らくのぼせてしまい意識が飛んだのだろう、肌は熱く、ゆでだこのようになって力なくぐったりとしている。

思わず抱きかかえる様にして支えたがお互い裸、イロイロまずいモノが当たってしまっている。意識するなよ本能。

「とりあえず、運ぶか……………よつと」

見ないようにして浴室から少女を抱えて運び出し、大きいバスタオルで極力ヘンな箇所を触らないようにして身体を拭きつつそのままタオルで体を包み、リビングのソ

フアーに寝かせて休ませる。

「一段落、と……」

一連の作業が終了してやっと一息つける。

作業中何度煩惱が現れたことか。

出てきては倒し、湧いてきては退散させ、ずっとそんなことを頭の中で繰り返していた。

「しかしまあ、あんだけい言われて嫌なものはないな」

まだ意識のない少女の前髪をすくいあげ、じつと彼女の寝顔を見つめる。

少し熱が冷めてきたのかちよつと苦しそうだっただった表情は和らいで自然な寝顔になっている。呼吸も落ち着いていて肌も熱っぽくはない。

ソフアーは少し濡れてしまったがまあ大丈夫だろう。

そうこうしていると少女が目を覚ました。

「んん……ここは……」

「やっと起きたか」

寝ぼけ眼で辺りを見回して俺を見つけると少し笑みを浮かべたが自分の恰好を確認してすぐに赤面した。

「ちよつと、なんでこんな格好してるの私……!」

「風呂でのぼせて気絶したから運んで寝かせておいたぞ」

「そ、そう」

タオルで全面を隠しながら上体を起こし、なんとか現状を理解する彼女。しかし納得はしていないと言う目で俺を見ている。

「……………何もしてない？」

「してないしてない」

なおキツイジト目で俺を睨んでくるのでなんとか有める。

「本当に何もしてないわよね？」

「本当に何もしてません」

なおもしつこく質問してくるが、タオル一枚巻いただけの恰好でこうも接近されると見る方が恥ずかしくなつてくると言うか、どうしても目がいつてしまいそうになるのをひたすら我慢してなんとか根性で持ちこたえる。が、それすらも怪しくなつてくる疲労感だ。

「ねえ、ちゃんと聞いているの？」

「聞いている、聞いているから許して！」

そんな状態がその後数十分続き、心身ともに疲労困憊し、もうクタクタになっていた。

なんとか尋問から解放されやつと就寝につける。

一人暮らしのこの家に女物の服なんて存在するはずもないのであの娘には申し訳ないが俺の服を着てもらおう。

裸ワイシャツなんてものはさせんぞ？ やつてもせいぜい裸Tシャツだ。

「と言うわけで悪いけど君の服がない。代わりの俺の服を着ていてくれないか？」

「いいわよ」

やっただぜ。

聞いてみたところ特に嫌な顔もせずそれなりに良好的なのでしばらくは俺の衣類を身に着けてもらおう。

もちろんこの娘の服は後でちゃんと買わせてもらう。仕方なくなんだ、仕方なく。

「別に服ならイメージで作れないこともないのだけれど」

「え？ そうなの？」

マジで？

何それ超経済的じゃんか。衣料品店涙目。

しかし服をイメージで？ つまりあの怪腕と似たようなものなのだろうか。

そういえばロングスカートも腕が生えた途端にミニワンピースになっていたところからすると質量は変わらず物体を変形させたりあるいはさっきのお風呂場でのように出現

させたりもできるのか？

「ただ継続的に使ったりあまり無茶しすぎるとお腹空くのよね」

「へえ〜」

ため息交じりに仕組みの一部分を教えてくれた。

カロリー消費で能力が使えるのはなかなかいい、それは面白い。

あれ、ならあの怪腕とかブーツとかの身に着けていた物とか日傘などはどうなのだろうか？ あんなに激しく形状が変化したり分裂したりしていたが。

あ、それでお腹空いてたのかな。

「あ、この怪腕^{うで}とかブーツとか傘とかは別よ。標準部分はそこまでお腹空かないけど運動と同じで慣れないこととか標準部分じゃないものだと結構エネルギー消費しちゃうの」

「ほほー」

なんか某トラブル系ラブコメに似たような力だ等のが大まかに分かった。

アレに比べれば若干下位互換ではあるが便利であることに変わりはない。

「まあ詳しいことは後日ゆっくり聞くよ」

「そうね、私も眠たくなってきたわ……」

欠伸をしつつ体を伸ばし、もう寝る寸前というところだ。

歯も磨いた、歯磨きが見慣れないものだからさせるのにちよつとてこずったが、なんとか終わった。

いちいち喘ぐんだもの、しかも口の中に歯ブラシが入ってるから呂律が回らないのは当たり前、口も開きつばなしで歯磨き粉を付けているので唾液を飲み込むことも出来ず垂れないようにはしていたがそれでも少し垂れてしまつてなんとも形容し難い光景になつていた。

「じゃあもう寝るぞー」

「ええ、そうね……」

もう意識のなくなる寸前でもう半分も瞼が開いていない。

早く床に就かねばこのままソファで寝てしまうことも回避できなくなつてしまう。

しかし重大な問題が発生。

誰がベッドで寝るのか？

家主の俺か、若干幼さの残るあの娘か。

俺がベッドで寝るのはいいがそれであの娘をソファで寝させるというのはちよつといただけないものがある。

ではあの娘を俺のベッドに寝かせるというのもどうだろうか？

男が使っている寝床に若い少女を寝かせる。

ちよつと危ないにおいがする。

「なあ、寝るところどうする？ 俺のベッドで寝てもらおうかと思ってるんだが嫌ならソファでもいいしなんなら布団も敷くし……」

「アナタの傍ならどこでもいいー……」

「お、おい」

こてん、と肩に頭を預けてきた。

眠気で意識が朦朧としていてあまりオーラのようなものが出ていない。

先ほどよりも結構大きく舟をこいでいるので恐らくもう限界なんだろう。

「ホントにもう寝ようか」

「うん……」

眠たいとは言っても細かい両手は俺の寝巻の袖をしっかりと握っているのでどうやら寝床を分けるのは難しそうだ。

やむを得ず俺は添い寝をすることを選んだ。

自室。

「電気けすぞー」

「ん、おやすみ……」

「おやすみ」

ベッドに二人で横になり、彼女はすぐ寝てしまった。

俺も早く寝よう、明日もあることだし……。

目を閉じると、ゆっくりと意識が遠のいて往く。

もう完全に意識がなくなると思ったら急に右腕に柔らかい感触がした。

「ん？」

「ん、すう……。」

見ると俺の右腕に体全体で絡んで腕を抱き枕代わりにしている少女がいた。

「もう疲れた……。」

言ったか言っていないかも分からず、そんな言葉が遠のく意識の中で頭に響いた夜だった。

4話 私の名前は

うるさいアラームが耳元で鳴り響く。

重たい腕を伸ばして携帯を掴み取り、スヌーズにして放り投げる。

数分してまたアラームが鳴り、今度は上体を起こして立ち上がり、携帯を拾い上げてアラームをしつかりと切る。

「ふあああ………」

大きい欠伸をして背伸びをし、深く深呼吸をして少し眠気を取る。

窓に立ちカーテンを開け、一瞬眩しさに目を閉じるが暫く朝日を浴びて頭が少しずつ活性化されていく感覚をじわりじわりと味わう。

「ふうー………」

良い朝だ。

いつもはこんなこと思ひもしないのに今日に限っては毎日平穩に過ぎていくことが何より平和なのだと言うことが良く分かった。

そう、俺のベッドで寝ているこの黒い娘が居なかったら。

「んん、すう………」

静かな寝息を立てて俺のベッドで寝る少女。

なんでこうなったのか自分でも分からないが、一先ず小難しいことは置いておいて、今は朝飯作ろう。

「何作ろうかね」

献立を考えながら顔を洗い歯を磨く。

とは言え半ばインスタントやら冷凍食品しかないこの家。

やっっているのは米を炊いている程度で、あとはほとんど冷凍ものばかり。

あ、卵は買ってるよ。

「目玉焼きとサラダは確定、あと肉類と味噌汁……」

あっさりさっぱり済ませたいのと朝はあまり食欲が沸かないので量は少なめになりやすい。

さてメニューも決まったしちやっちゃと作りますか。

コンロにフライパンを置いて点火、しばらく熱してベーコンを乗せていく。

ぱちん、ぱちんと油が弾けてフライパンの上に広がっていき、ベーコンがある程度焼けてきたところで卵を投下。

少し火を通してお湯を回しかけてすぐに蓋をする。

数秒待つてから蓋を取っ払うと半熟ベーコンエッグがいい感じに出来上がっていた。

葉野菜を適当に千切つて皿にのせる。

先ほど焼いたベーコンエッグも同じ皿に載せて卓に並べる。

袋を開いて中のかやくやら具が入ったものをお椀に入れ、お湯を注ぐ。

白米を茶碗に盛つて完了。

「ん、おはよ………」

「おう、おはよ」

そうこうしてたら黒娘が起きてきた。

「ご飯なあに………?」

「米と味噌汁とおかず」

寝ぼけ眼でふらふらと席に着き、俺もならつて座る。

「いただきます」

「いたらきまふ………」

もごもごと飯を食つて早々に仕事に行くため着替える。

スーツを着て荷物を持ち、鍵を握つて玄関に立つ。

「じゃ、俺ちよつと仕事行つてくるから、留守番よろしく」

「ふあゝゝい………」

「悪いけど昼は昨日の晩みたいにカップ麺食つてくれ」

「わかったら〜．．．．．」

「いってきまーす」

「あ、待って」

「どした」

思い出したといわんばかりに唐突に、黒娘が立ち上がってこちらに小走りできて「ちよつと屈んで」と申すので仕方なく屈むと、頬にキスをされた。

「ちゅっ」

「うおおッ!？」

キスされたを頬に手を当てて後ずさる。

朝から脈拍上昇してるのにその原因は小悪魔のような悪戯っぽさを含んだ微笑みで見つめてくる。

「行つてらっしやい、ご主人様♪」

「コイツ．．．．．ああ行つてきます!」

．．．．．
．．．．．
．．．

仕事と言っても俺は基本在宅業で、内容の打ち合わせで出社している程度だ。

出社した日はすぐ帰るのも億劫なので一応定時まで仕事して帰る。

「おはようござーます」

「ああおはよう。おや、どうした？ やつれているようだが」

「いえ、何でもありません……」

ビルの一室にて自分の上司ともいえる人、小林さんのところへ行く。

仕事の内容が書かれた書類を受け取って自分のデスクに着く。

キーボードを叩いてプログラムを打ち込む。

「あ、そうそう村瀬君、ちよつといいかな」

「あ、はい。なんでしようか」

指示を聞きつつ、仕事をこなしていく。



部屋で一人、少女がゴロゴロとのた打ち回っていた。

「なんであんなことしたのよ私いいい!!」

原因は外出する前のキス。

口にはしてないがそれでも恥ずかしかった。

買ってもらって数か月、お互い会話してまだ一晩だが何もあそこまで積極的にならなくてもいいだろう。

「ううう………」

落ち着け、忘れよう、考えないようにしよう。

「ふう………」

落ち着いてきだして改めて部屋を見る。

フィギュアが数体、ステンレスの棚の上にスタンドで飾れている。

その隣に本棚。大きい本や小さい本、様々なものが何かの規則に従って並べられている。

横を向くとデスクとパソコンが置かれ、隣の棚には付箋や資料が垣間見える。

「あのあたりは触らないほうがよさそうね」

横に私が座っているベッド、と。

暇なので適当に本でも読もうかしら。

「本、雑誌ばっかね」

本棚に置かれたホビー雑誌を適当に抜き出してベッドに腰かけて読みふける。

ふんふん、へえー。

「やっぱりこうなのが好きなのねえ………」

掲載されているのは模型やフィギュア、子供向け玩具から大人向け玩具等、多種多様な作品や商品の情報が載っていた。

自分も元はこの中の一つだったのだ。

具体的には言えなくても感慨深かったりちよつとジェラシーを感じたりなど、思うところはあった。

「ふう、結構内容あるのね」

あまり詳しくなくても細かいことがつらつらと書かれていたので一冊読み終えたころには大分時間が経っていた。

「もうお昼ぐらいじゃない。かつぶめん、だっけ。食べよつと」

本をしまつて台所に直行。

昨日彼はここら辺から取つてたわよね。

少し高い位置に昨日見た物体が数個、陳列していた。

手を伸ばしても届かない。

「勝手にしてつて言つた割に気が利いてないじゃないのよ……」

落胆し方を落としながら怪腕を展開する。

そこまで大きいものでなく、太さは自分と同じか少し太い程度、細長く遠めに見れば枝のような腕が生えた。

別に高いところのものを取る程度だしこの程度でいいだろう。

「ほっと」

目的のものを掴んで怪腕から受け取り、怪腕を収納して透明なビニールを破る。

「昨日どうやってつくってたかしら、えーつと、こうやって……」

慣れない手つきで蓋を開け、中身を見る。

麺、粉、ちんまりとしたコロコロした物。

えーつと、お湯入れるのよね……。

自分が苦手とするもの、熱を持ったものを扱わなければ、このご飯は食べることはできない。

横を見ると円筒形の先端を変わった形の楕円形に潰したようなもの、ポットの前に立つ。

「ええ大丈夫よ、自分が濡れなければいいんだから、ちゃんとこの容器の中に入れてほしいんだから……」

震える手を気力で抑止し、カップを飛び出た注ぎ口の下に構えて頂部の円形のボタンに手を添える。

「……………えいっ！」

ジョロロロロ……。

「ひいッ！　が、がが、我慢よ私……これが終わればご飯が食べられる、ご飯が食べられる……」

しばしお湯と格闘する少女だった。



会社。

「村瀬くん、最近どうだい？」

昼休憩、小林さんが缶コーヒーを片手に話しかけてきた。

昼飯のパンを食べる手を止め小林さんのほうへ顔を向ける。

「どう、とは？」

「近況報告だよ、彼女は出来たかい？」

「あんまりからかわないでください……」

「はっはは」

この人はいつも独身の俺にこういう質問をふっかけてくる。

「とにかく、もういいでしょ。俺仕事にお戻りますよ」

「根は詰め過ぎないようね」

「へへへへ」

あと四時間。



家。

なんとか食事を終えて部屋に戻って荒らさない程度に物色していた。

一応一口一口冷ましながら食べたものの、少しだけ火傷してしまった。

「いへへ……あんまり口の中動かすと擦れて痛い……」

さて、彼がフィギュアとかが大好きだと言うのが部屋を見回して分かった。

では今飾られている物の他にも何かあるのではないだろうか？

そう思い部屋や周囲の物置などを探索している。

「何かないかな。あ、モンスターの小さいフィギュアあった」

ボックスで収納された小型の箱には触ってみた感じどれも中身がぎっしりと入っているようだった。

封が切られていないので開けるのは止しておこう。

「他には？ あ、ハンターフィギュア……て、キリン装備の女ハンターじゃな

「い」

出てきた箱は先ほどの小型の箱を二つつか三つほど足したぐらいの大きさのもので、箱正面の窓から覗く女性ハンターはグラマラスな体をキリンS装備という布地の面積が少ない装備に身を包み、これでもかと言うほど至る所が強調されている。

胸とか胸とか胸とか……。

「ふん、私だって変身能力使えば体系だって自由自在に変えられるんだから……」
デフォルトの小さめの体を見下ろして誰に言うでもなく一人愚痴る。

寄せても皺のような谷間が出来る程度で、この女性ハンターよりも全然小さい自分の体に落胆せざるを得ない。

「嫌になってきた……。あ、そういえば私の箱はあるのかしら？」

もう少し漁ってみる。

大小様々な形や色をした箱を傷つけないように気を付けながら箱を移動させていくと、目的のものが見つかった。

「あった」

黒い箱で正面には自分のイラスト、背面には商品説明とギミックの紹介、側面は商品ロゴやサンプル画像などが掲載されていて、どことなくダークな雰囲気が出ていた。

「こうしてみると中々カッコいいじゃないかしら……？」

ナチュラルに自画自賛したが箱のイラストと今の自分では色々違っているので問題はないだろう。

箱を開いて中のブリストアを引っ張り出すがそこには何も入っていないかった。

恐らく自分が人になったときに一緒に消えたのだろう。

「箱とケースと説明書だけっていうのも物悲しいわね……あれ、これなにかしら？」

箱の内側、蓋の辺りに何か手書きで書かれている。

人の名前だろうか。単語を二つ合わせたほどの長さの文に目を向ける。

「黒姫、レシカ……？」

クロヒメ、クロキ？ はて、どう読むのか。

と言うよりこれは何なのだろうか？

人の名前だと言うことはなんとなく理解出来るが、誰の名前なのか、もしくは誰に当てた名前なのか。

ん？ 誰かに当ててる名前？

「も、もしかして、私の？」

「へ……？」

顔が耳まで真っ赤になり、動き出すまでにたつぷり数十分を費やした。



仕事も終わり帰路に就く。

あいつはちゃんと留守番出来ているだろうか。

ある程度散らかってるぐらいの覚悟じゃないと胃の限界が先に来そうだ。

マンションの一室、自分の部屋の前に立つ。

鍵を開けて覗くが特に変わった様子は見受けられないので一先ず安堵した。

「ただいまー」

「………ッ!」

なんだ今の、吸うような悲鳴が聞こえた気がする。

何か恐ろしい事でもあったのだろうか。

靴を脱いで彼女のもとに行くと、元自分が入っていた箱を大事そうに抱えて座り込み、顔を赤らめて信じられないものを見るような顔でパクパクと口を開閉しながらこちらを見上げる少女がいた。

「何してんの」

「あの、これは、えっと、あの………」

しどろもどろになりながら文にならない言葉を連続的に出している。

とりあえず屈んで目線の高さを合わせてやると「ひっ……」とさらに顔を赤くして、息をのむ。

なんなんだ一体。

「どうしたんだよ、なんか変だぞ」

「……」

俯いて何も喋らない。

留守番中に何かあったのか分からないが、いつまでもこのままだと言うのは厄介だ。

「何かあったのか？」

「……これ」

彼女はすつ、と自分が抱えていた箱を差し出す。

受け取って眺めるが特に何かがあるというわけではない。

内容物もスタンド以外皆消え去っていた。

「これがどうかしたのか？」

「中……」

「中？」

言われた通りに箱の中を見る、特に変わった様子なんて……。

「なんだこれ」

中に名前が書かれていた。

そしてそれを見たと同時に忘れていた黒歴史きおくを思い出した。

昔から自分の物に名前を付ける癖があった俺は治った今でも名前のないフィギュアとかデフォルトの名前が通称とかだったりするものには名前をつけるようにしている。

このゴア娘も例外ではなく、公式の名前が無かったので自分で勝手に名付けた。フルネームで。

それが箱の内側にかかれているこれ、『黒姫 レシカ』。

彼女の名前として書いたが日が経つにつれてそれも忘れてしまい、ゴア娘と呼んで飾っていた。

「ああー………そういや考えてたなあ」

「あの、これ私の名前よね？」

「ああそうだよ、クロキ レシカって読むんだ」

「くろき、れしか」

復唱してしつかり覚える彼女、赤かった顔には羞恥心でも不安感でもないような表情が垣間見えた気がする。

目線が泳いでいる彼女、レシカは一呼吸おいて俺の方を向いて、口を開けた。

「これから、私この名前なのね!？」

「そ、そうだけど」

凄^い興奮^{気味}に言^われ^て後^ずさ^る。

名前^を貰^うとい^うのはこ^こま^で上^気す^るも^のな^のだ^らう^か。

満^面の笑^みで^るん^らと^楽し^そう^にし^てい^たレ^シカ^はこ^ちら^に向^き直^り俺^のす^ぐ目^の前^まで^来た[。]

「あ^りが^とう[!] ぐ主人^様♪」

「お、お^う」

な^んか^キャ^ラ崩^壊し^てな^い?

い^つも^スカ^して^ニヒ^ルな^感じ^じゃ^ん。

年^相応^つとい^つた^感じ^では^しや^ぐ姿^を眺^めて^いる^とい^きな^りレ^シカ^に抱^き着^かれ^て。

ち^ゆう[。]

「ん^ん——ツ?!？」

「ん^ー……ふ^はあ^っ」

い^きな^りの^キス^に動^転す^る。

離^そう^にも^腰の^曲が^つた^状態^で方^から^腕を^回さ^れて^しつ^かり^ホール^ドさ^れ、^力が^入り^づら^い態^勢に^なっ^てし^まい^動け^なか^つた[。]

「んう、あむ……」

そのまま数分、ぎゅーつとされたままの態勢から解放されて飛び退く。

「い、いきなり何を……!」

「えへ、勢いでやつちやった」

両頬に手を当てて艶めかしく腰を振るレシカは上の空と言った感じで、たぶん聞こえてない。

火照った顔でこちらを向いて、何をされるのか全く予想できなくて身構えた。

「これからもよろしくね、ご主人様!」

「あ、ああ」

その夜、悶々とした気持ちを抑えようと中々寝付けない二人だった。

5話 見逃したのは不安の種

あれから数日して、あの子、レシカは笑顔というか表情が増えた気がする。

「あら、おはよう、ご飯できてるわ」

「行ってらっしゃい！」

「お帰りなさい、疲れたでしょ。お風呂、入る？ 一緒に……なんてね」

「おやすみなさい、良い夢をね」

惚気てなんかいない。

決して惚気てなんかいない。

いや、表情豊かなのはいいんだが、問題は別にあるのだ。

スキンシップも増えた。

何かにつけてキスやハグは当たり前。

添い寝はしょっちゅうで酷いときはヨバーイだ。

まだ守れているが俺の知らないところで奪われてるとか言われたら一週間は寝込む

ね。

そんなわけで疲れている。

「なあ、レシカ」

「なあに？」

声をかけると柔らかい笑みを浮かべて洗い台から顔を覗かせる彼女。

ここ最近の食事はレシカが作ってくれている。

パソコンを教えてみたら料理サイト等を覗くようになったようで、本人も楽しんでるようだし止めさせる要因が何一つないので好きにやらせている。この前なんで料理にハマったのか聞いてみたら「ご飯が美味しかったから」とのことだった。

美味しいからいつか。

「買い物行くんだけど、どうする？」

「付いて行くわ。待ってて、準備するから」

「わかった」

そう言うのとエプロンを外してお召し物の形を変えていつものゴスロリワンピースに変えて小走りに近くに来た。

「じゃ、行きましょー」

「おー」

近所のスーパー。

ふらふらと歩いて食品を覗き見る。

カートに食品や調味料を放り込んでいき何か買っていないものはないか頭の中で数えていると、レシカの姿が見当たらない。

「っ!?!」

思わず辺りを見回すとどうやら即席麺のコナーに釘付けになっていた。

以前食べた先端を落とした円錐形のようなデザインのカップ麺をしゃがんで持ち、大事そうに眺めている。

「……………」

「欲しいのか?」

「っ! いえ、そうではない、ことも、ないんだけど……………」

声を掛けられて慌てて商品をツ戻しながら勢いよく振り向いたレシカは羞恥に顔を赤くしながら俯きがちに小走りに駆け寄ってきた。

しかしなおも恋しそうにインスタント食品コーナーを眺めているのであからさまに誘導してみる。

「なんかジャンクフード食いたくなってきたなあ」

「へ、へー」

ちらちらとこちらを見ながらチャンスを見つけたと言わんばかりに「じゃ、じゃあ」と言葉を切り出すレシカ。

かかったな。

「レシカ、悪いけど適当に四つほどカップ麺取ってきてくれないか？」

「わかったわー！」

食い気味に返事をしてすぐさまＵターンして、インスタント食品の棚に戻た彼女は目を輝かせながらあれこれと吟味している。眉間にしわを寄せて選んでいるその姿は真剣そのものだった。

カップ麺であそこまでなれるものなのか？

そうして、やっと決まったのか花のような笑顔で手に持っている容器を大事そうに抱えて走ってきた。

「決まったわー！」

「そうか」

シーフードと醤油が二個ずつ。シンプルだがそれが美味しい二種類を選んでくるとは。と言うよりシーフードはレシカが初めて食べた食べ物だった。

「好きだなあ……」

「ええ、とつても」

料理を覚えてこう言ったものもあまり食べないかと思ったが案外そうでもないようだ。

必要なものも揃ったのでレジに通す。

会計の時に周囲の視線が集中していた気もするが気のせいだろう。

帰りがけ荷物を二人で分担して持つて店を出たら、屋台の車が止まっていた。

香ばしい香りに誘われて電光板に集まる羽虫のように近くに行くかどうかやられたこ焼きの屋台のようで、油のはじける音がする。

「美味そうだな、レシカもいる?」

「ええ、お願い」

「あいわかった。店主さん、たこ焼き二皿下さい」

「あいよー」

慣れた手さばきで焼けたたこ焼きをひよいひよいと皿に盛りつけ、ソースにマヨネーズ、鰹節と青のりをふさつとまぶして即座に完成。流石職人。

「はいお待たせ」

「ありがとうございます」

受け取つて近くのベンチに座つて食べる。

「ちよつと買つてくるから待つてろ」

「ん」

すぐに水を買ひ与えるとペットボトルをひったくつて栓を開けてごくごくとの適度に冷やされた透明な液体を飲む。ぷはー、と一息ついて肩で息をする彼女の背中をさすつて宥める。

「大丈夫か？」

「だいじょうぶなわけないでしよらいようぶなわへらいえひよ!!」

「悪かった」

すつごいデジャブ。前にもこんなことがあったがまるで成長してない……。

先に食べ終えた俺は一個一個ふーふー冷ましながらそれでもあふあふ言いつつ食べる彼女を眺め、ノスタルジックな感情に浸っていた。

水を途中に挟ませつつやつと食べ終えたレシカの口元を拭つてやり、舟をゴミ箱に捨てて帰路に着く。

「美味しかったか？」

「ええ、すつごく!」

「そりや良かった」

空いてる腕で左腕に絡みついてくるレシカを振り払おうとも思ったが荷物の重さで

振るのも一苦労しそうだったので諦めてそのままにして帰る。

自宅。

荷物を置いて袋の中身の物を整理して一段落つき、ソファアに座り込みまったりする。

荷解きをしてソファア近くで屈伸をするレシカを眺めていたら、上げられた肩に釣られてか若干、ほんの少しだけレシカの黒い下着が見えてしまった。

慌てて視線を外して冷静になって考える。

はて、いくらミニスカートとは言え腕を上げた程度でパンツが見えるものだろうか？

「レシカ、お前ちよつとでかくなつたか？」

「な……セクハラ!？」

「いやそうじゃなくて、身長伸びた？」

「身長？ さあ、測つたことないからわかんない」

「そうか」

本人に自覚無しか。まあ短期間で身長が伸びると言うのもなあ。成長期ならあり得るだろうけど。

立ち上がってトイレに向かう。

その時、パキッと足の裏で音がして、軽いものを踏む感触がした。
「なんだ？」

足の裏を見ると黒い欠片が見つかった。

光沢のない、光を飲み込むような黒色をした欠片は指で潰してみると簡単に砕け、散り散りになった。

「なんだろう、まあいつか」

「どうしたの？」

「いや何でもない」

「そう」

何かあったのかと聞いてきたレシカに適当に答えてトイレに駆け込む。
けどその時は気が付かなかった。

レシカの頭の触角の、先端がほんの少しだけ金色になっていたことに。

6話 変わっていく彼女

最近レシカの様子がおかしい。

いつもならスキンシップ多めに接してくるのが最近は何干距離を開けられている気がする。飯の時もあり表情が変わらないし、帰ってきたときも抱き着いてこなくなつたし、暇そうにしている時はいつも本を読むか俺に話しかけてくるぐらいなのに、最近ソファーに項垂れてため息をついているだけだ。

気になつてもなんて声を掛けたいか分からず、もしデリケートなコトだったとしたら後が怖い。

気休めに何かできればいいが、それも分からん。

無知な自分が憎いぜ。

「ねえ、シンジ」

「お、おう、なんだ」

振り向かず、声だけ意識を向けてきたレシカに慌てながら返事を返す。

「アナタは、自分のカタチが変わってしまうことをどう思う？」

「ええっと、そうだな・・・」

内容がアバウト過ぎて回答に困ってしまった。自分が変わる。要は成長するとか、趣味とかが変わるとかで捉えていいのか？

「そうだな、変わるのには別に嫌じゃないな。原因がどうあれ変わるの自分だし、そもそも俺は多分気付かないと思う」

「……そう」

一週間後、レシカに変化が現れた。

まず目に入ったのは服装の変化だった。いつものワンピースではなくシャツにスカートと、落ち着いた格好になっていた。

「お、服がいつものワンピースじゃない」

「ちよつとね」

以前より身体的な成長が見受けられ、身長も伸び発育が良いのでワンピースでは身に余っているな、と思っていたので、やはり今の体格に見あった服を着ると言うのは大事だ。

「これまでシンジの目付きヤラシクなってたから」

「ぐつ、そ、そうか？」

「ふふつ。凶星ね」

「このやろ」

あ、今笑った。

久々に見たレシカの笑顔に、小さな安堵を覚えた。

更に五日後。

レシカの触覚がご起立していた。

「どうかしたのか？」

「何でもない、何でも……」

レシカ本人は何故か少々不機嫌で、いつものほうつとした表情はなく複雑な顔をしていた。

眉間に少ししわを寄せ、頬杖を突く左腕を右腕で握りしめ、全身が力んでいるように見えた。

「えつと、コーヒー飲むか？」

「ありがと、一杯頂戴……」

「おう」

コーヒーを二杯淹れて、片方はミルク多めで少々ぬるくなるようにして、それを渡してやる。レシカは少しやつれた顔をしてマグカップをありがと、と受け取って大事そ

うに両手で持ちながらちびちびと飲み始めた。

彼女の横に座り、俺もテレビを見ながらコーヒーを啜る。

「なあ、レシカ」

「なあに……?」

疲労が見える目を向けて耳を傾けるレシカ。

時折体を震わして息が荒くなっている。風だろうか。

「ちよつといいか?」

「な、なに?」

レシカの額に手を伸ばして熱を確かめる。

体温は平均よりほんの少しだけ低い彼女は今日は俺の体温よりも少し熱いぐらいだった。

「熱っぽいな、寝ておくか?」

「うん、そうする……」

あまりにおぼつかない足取りで部屋に行こうとするので思わず駆け寄って支えてやる。

「見てらんねえよ」

「ん、ありがと……」

寝かしつけてやり、その日は気に触れないよう少な目の看病で終わらした。

三日後。

レシカの様態が悪化した。

目の前には寝床に入り、肩で息をしながら全身から滝のように汗を流している少女。冷却シートを貼ってやってるがそれも意味がないように思えてきた。

「レシカ……………」

「あ……………シンジ……………」

今にも消えてしまいそうなか細い声で俺を呼ぶ少女。

触角は今日も隆起していてそれに続くように尻尾も伸びて、ベッドの上で疼くように這いずっている。

「何か食べたいものとか、ないか？」

「今は、眠たいから、いいや……………」

「そうか……………」

何かしてやりたいけど、病人には静かにしてやるのが一番だ。けど看病する側としては何かしてやりたくてもどかしい。

「ねえ、シンジ……………」

「なんだ？」

「手、握って……………」

「分かった」

じゃあと差し出された手は震えていた。しかし。

「あつ……………」

レシカは怯えたように目を見開き、優れない顔色は青くなっていた。

伸ばされた手は豹変して、小さな少女のものでなく、怪物のように禍々しく歪んだものになっていた。

「ごめんなさい……………」

「いや、その……………」

悲しそうな顔をしてすぐに手を引つ込めようとしたレシカの手を無理矢理掴み取り、強く握る。

「そんな、止めて……………」

「嫌だ」

「……………ありがとう」

「ああ……………」

彼女が消えてしまいそうで、喪失感を払拭しようにもどうしても目の前の出来事が大

きすぎで、とても怖かった。

暫く手を握っていたらいつの間にかレシカは眠っていた。

「……死なないでくれ」

どうしようもないほどやるせない。

握っていた手を見ると黒い破片が付着してた。

翌日。

大きな物音がした。

思わず振り向いて無意識のうちに息が止まる。

短く重たげな騒音が断続的にドアを隔てた壁の向こうから聞こえ、近づいて耳を添わすとかすかにレシカの掠れた声が聞こえてきた。もう我慢が出来なくなつた俺は躊躇なくドアを開くと、そこに広がっていた光景に絶句した。

「あ………」

「おい大丈夫か！ レシ、カ………」

倒れたり傾いたり、物によつては破損も見受けられる家具が散乱している部屋の中央で、レシカが泣きじやくつて上擦りながら俺を見上げていた。

しかし様子がいつもと違う。

所謂、狂竜化状態というやつを発動していたのだが展開されている怪腕の片方は膨張し、金色の外殻が肘部から爪先にかけて黒い外殻を突き破つて露出していて、それに連なつて片側の腕や脚に身に付けられている装備が変化している怪腕と同じようにゴアの禍々しいものから神聖的なものに形を変えていた。

頭部も触角が隆起しているが片方はは反対の触角よりも太く、より強固そうなものへ

変化していて流麗な長い黒髪には白金色の髪が一束ほど増えていた。

何よりも、ルビーのように紅く美しかった瞳は、右目だけ変色していて、白目は黒く、瞳孔は赤い燐光を微かに灯していた。

そんな状態のレシカは必死に変化した半身を抑えるようにもがき、苦しい嗚咽を漏らしながら呻いていた。

「うっ……ぐううツ……あぐあ……!! はあツ……!!」

「おいレシカ!! しっかりしろ!!」

「いやあっ!!」

「どお!」

がむしやらに振られた怪腕に薙ぎ飛ばされ壁に強く背をぶつけてしまい視界がちかちかして上手く息が出来ない。

立ち上がるうにもまともに運動もしていない体は先ほどの一撃で根を上げてしまい身動きが取れない。

「あっ……」

「いっふっ、レシカ……!」

床からの低い目線、暗幕をかけたような薄暗い視界。そんな景色で見えたのは恐怖や

怯えの表情を浮かべる彼女の震える姿だった。

「ご、ごめんなさい……！」

「あ、待てレシカ!!」

やっと立ち上がったと思った束の間、レシカは窓を開けてそこから飛び立ってしまった。

「嘘だろ……！」

荒れた部屋、風の吹きこむ窓の向こうにどんどん小さくなっていくきらりと光る彼女の姿しか、今の俺の視界には映らなかった。

7話 思わぬ行先

助けて。

殺して。

悲しいの。

苦しいの。

生きたい。

楽になりたい。

さつきから二つの感情が入り交じり、ぐるぐると廻つていて頭が張り裂けそうだ。

今すぐ彼のもとに戻つて謝りたい。しかし体は私の言うことを聞かず、ありもしないフルサトに向かつて飛んでいる。皮膜感のある怪腕が疼き、空中でよろめいて落下しそうになるのを薄れそうになる意識で食い止め何処に跳んでいるかも分からない飛行を継続させる。

「私はどこに行くの．．．．．？」

遠くなる意識の中でふとそれだけを抱いて、眠った。



「レシカーツ！ どこだー!？」

俺は部屋から飛び出して周りなんて一切気に掛けずにレシカを呼び、町中を走り回っていた。

奇異の視線なんて気にも留めずレシカを探していると突然名前を呼ばれてこけそうになるのをなんとか踏み止まって振り返ると、小林さんがいた。

「や、やあ村瀬君。そんなに急いでどうしたんだい？」

「小林、さん……」

俺は事情を掻い摘んで小林さんに話すと、小林さんは顔色を多種多様に変えながらなんとか話の概要を飲み込んでくれたようで、とりあえず重たいため息を吐き出された。説明始まったあたりから信じられないという顔をしていたが、それでも最後まで聞いてくれたのはありがたかった。

「はあああああ……」

「なんか、すみません……」

「色々危険な臭いがするけど、この際それは良しとしよう」

「スミマセン……」

「それよりも、まずは彼女のことを探さないとね」

「はい」

「そうだ」といって小林さんは懐からスマホを取り出してブラウザのニュースページを開いた。そこには速報ニュースが飛び交い様々な情報が縦横に並んでいた。そしてその中に一つの動画記事が目に残り、それを二人で再生してみるとやはりと言うか、飛んでいる少女の動画が投稿されていた。

「なんだこれ……」

「大分見られてますね……」

ネットにレシカらしき情報があったのは幸か不幸かわからないが、それでも手掛かりがあったのだからまだ良いのかもしれない。ふと周囲を見てみると街を歩く人々のうち何人かは手に持っている電子端末の画面に釘付けになっており、ある者は「どうせ合成」と否定し、またある者は「もしかしたら」と肯定してすぐさまその場を離れて行っている。

「ちよつとレシカちゃんの安否が気になるな、早く見つけないと」

「はいー」

小林さんの車に乗せてもらい、二人であちこちと探しまわった。レシカが飛んで行ったと思われる方向に進んでみたが、手掛かりは掴めず焦りが募るばかりであった。どこ

を探してもやはりレシカは見つからず、もう空はすっかり暗くなっていた。

「今日はもう帰ろう、捜索は明日に……」

「わかりました、ありがとうございます……」

街から離れて山林まで来たものの、手掛かりもそれらしい物も見つからず、今日は諦めて帰ろうとした時。

「あ、れ。人だ」

木陰からがざりと枝葉をかき分けて、一人の奇怪な女性が姿を現した。

褐色肌が垣間見える格好は明らかにコスプレのような類のものなのに、妙な使用感が見受けられ、鱗や皮のようなところは合皮や作り物といった安っぽさは一切感じず、どこも本物の素材を使っている気がした。

しかしあの恰好、どこかで。

あ、ゲームだ。

少し前にやっていたモンスターハンターシリーズの外伝作。その装備に似ている。

迅竜と言う猫と蛇を足して前足に翼膜を付けたようなモンスターから作られる装備に似ている。忍者のような意匠や猫耳のように跳ねている頭頂部、足袋やサラシなど共通点はあるし、見たことのある個所もあるようなのでそう確信する。

問題は何故そんな恰好をした女性がこんな山林地帯にいるのかということだ。

何かの撮影だろうか。

それにしてもあるものはその身一つと背負っているライトボウガンらしいもの。カメラや三脚などは一切見えない。そんなものが入っていきそうなバッグすら見当たらない。

「あの、どちら様ですか？」

ついに業を煮やした小林さんが本人に直接聞きに行った。

よくやるな。

「プロトガンナー黒式。クロでいいよ」

「ア、ハイ」

「」

キャラになりきっていらっしやるのか、それとも何かのアカウントの名前なのか恐ろしいことを呟いた。関わらない方が良いのかな。でも現状この人の話も聞いておいた方が良くもするしなあ……。

「あんまり、信用してないね？」

「そりゃあもう」

ナルガ装備の女性はボウガンをリロードしながら背中から回し、脇に挟むようにして構えて、近くの樹木に向かって数発、連続して弾丸を発射した。着弾した弾はそこから

少しの間をおいて弾けて、乱雑な引つ掻き傷のようなものを幹に深々と残して食い込んだ。

「ええっ!?!」

「どうかな、少しは信じてもらえたかな?」

銃口からあがる煙を払いながら少女、クロは己の言葉に真実味があるかどうかを聞いてきた。

それには勿論首を縦に振ったが。

「ところで、アナタたちは、コレが何か知ってる?」

「それは!」

クロが差し出してきたのは真つ黒な甲殻。

ひび割れて零れた破片のようで、生気も艶もなく干からびたようになっていたが、まだ冷めきつていなかったらしくほんのりと熱を感じた。

「どこでこれを!?!」

「これなんだけど、今日こつちに来た時に、落ちてきてね」

「コツチ?」

彼女の言葉に引つ掛かり聞き返してみると、突拍子もないことだがモンハンの世界から来たと言う。

いきなりそんなことを言われて一瞬ふざげているのかと思ったが先程のボウガンの性能然り、何よりレシカの存在自体が奇想天外なので驚きも薄れなんとか話を飲み込めた。話を拗ねて聞き終わるころには頭がパンクしそうになっていた。

「つまり、人を訪ねて異世界から来ましたって？」

「そゆこと」

「私、頭痛くなってきた……」

話をしている子で小林さんは目を回していた。SF過ぎて理解が追い付かないのも頷ける内容なので仕方ないと思う。何せ俺自身すべてわかつてはいないのだから。

「話は戻るけど、レシカちゃんが何処に行ったか分かるかい？」

「それなら、何となく分かるよ」

「ホントか!？」

手掛かりが見つかって希望が見えた気がした。

「行先は、多分私のいた世界」

「つてことは、モンハンの世界に？」

「そっちの言い方なら、そうかな」

すれ違いになったようだ。

しかしどうやって行くんだ？ レシカは文字通り飛んで行って場所なんて分からな

いいし、目の前のこの子どもどうやってこちらに来たかと言うのも分からなければどうしようもなくなってしまう。

「行く方法なら、あるよ」

「ホントか、教えてくれ!」

ちよつと待って、と静止して腰のポーチから何かを取り出す少女。

出てきたのは一つの繭だった。

「なにこれ?」

「空間移動のための、ムシ」

「空間移動?」

謎の単語に理解できず、思わずオウム返しで聞き返した。

「書物に載っていた、空間を歪めて別の場所に無作為に飛ばす能力のある、生き物なの」

「は、はあ」

説明を受けてなお分からないが、ピンクの扉にたいに思っていればいいのだろうか。

それにしても空間を歪める、か。また随分と変わった生き物だ。随分前に何かアニメで見たような気がする。繭と言うのも引つかかるが、今はそれより優先するものがある。で今は省略してもらおう。

「このムシは特別で、異世界に任意で行ける」

「すごいな」

セルフ異世界転生が出来るというものだが、それはそれで何か大変なものがありそう。

「それで、それをどうやって向こうの世界に行くんだ？」

「やり方簡単。これを所持して隙間を埋める」

「ん、んん？」

簡単悦明されたがよくわからない。

すかさず、「はい」と手渡されたのは大きな布。

「それを大きく広げて、ムシを持って中に入る」

「それに何の意味が……」

「隙間を埋めて、完全に隙間を無くすの」

なるほど、隙間を埋めると言うのは密閉空間を作るということか。

その中に入るのが転移のための条件らしく、少しでも隙間があったり行先に密閉空間がなかったりすると出れなくなったり転移に失敗してしまうことがあるらしい。

「それじゃあ、何人行くの？」

「俺は行く」

「仕方ない、私も行くよ」

「小林さん、ありがとうございます……！」

感激で目頭が熱くなってき俺に「ただし」とあからさまに付け加える。

「帰ってきたらご飯奢ってもらうぞ?」

「この恩に比べたら一飯なんて安いもんですよ」

「決まった?」

「ああ」

「行くから出来るだけくっ付いてて」と言われて俺と小林さんは少女に触れて身を寄せる。「布広げて」とう合図の元、上に向けて大きく預かっていた風呂敷をばさり、と広げて三人が屈むようにして被る。

中は暗闇になっていたが、隙間が無くなった瞬間夜の暗さではなく、一切の光が見えない暗黒空間に切り替わり、得体のしれない不安感に襲われた。

暫くして真つ暗な空間に光が差し、布の擦れる音以外の音が微かに聞こえてきた。

「繋がった」

「繋がったて、何が?」

「行先」

もういいよと言われて風呂敷から這い出ると、石造りの家屋の中に居た。

生活感があり、暖炉の火は消えていたが、囲炉裏の中の炭は新しく、それがよりこの

家に人が居たことを物語っていた。

「()は？」

「私の家」

「そりやまた」

外に出ると向こう同じく夜中のようで、近辺の家には明かりが灯っており、身支度をして出かける者や、今住居に帰ってきて一服している者もいる。そのどれも民族的衣装や獣の素材で作られたと思われる装備や金属製の鎧等を身に纏い、遠くの方では狩人、学者などで賑わっていた。

「はは、すっげえ……」

「完、全にファンタジーの域超えてるよ……」

現代人二人仲良く呆けてしまった。

目の前のナルガの少女に付いていくと、集会所と思われるところから白色が基調の制服を着た人が駆け寄ってきた。見たところ随分と慌てた様子の子の彼は一枚の依頼書を握りしめていた。

「黒式さんッ！」

「どうかした？」

依頼書を提示する彼は肩で息をしており、それだけ急な依頼なんだと言うこと窺え

る。依頼書を受け取った彼女は内容を早々に読み上げて一言「大体分かった」と告げて小走りで自宅に戻っていった。

身支度をしに行っていたのか、暫くして帰ってきた彼女は先程までのナルガ装備とは細部に若干の変更点が見られた。

見たところ迅竜の装備だが胴は網状のインナーがないものになっており、肘から手首にかけて左右それぞれ三本ずつナイフの先端のような棘が生えている。

そして他は変わらずそのままの、黒色が基調の装備に反して目立つ白いマフラーを巻いているのがとても特徴的だった。

「本気モード装備」

「お、おお」

ゲームはエンジョイ勢なのでどれほど強いのか分からないが依頼文を読んでいる最中から気の抜けていた目が座りだしていたので言い出せなかったが、え、これからクエスト行くの？

「な、なあ、今からクエスト行くのか？」

「うん、そうだよ」

さも当然、と言わんばかりにさらっと言うので呆気にとられたがすぐに持ち直して食い下がる。

「自分でも凶々しいとは思うけどもレシカの事は……」

「大丈夫、今から行くのは」

「多分、そのレシカちゃんのカエスト、だから」

「なんだと……」

クロが受け取ったクエストは、禁足地に現れた謎のモンスターの、狩猟クエストだった。

8話 帰る場所

ギルドの方々には黒式が話を着けてくれて同行の許可が降りたので、余計なことをしないように着いていった。

結構怪訝そうな目で見られていたが、そんなものに構っていられないほどこっちも必死だったので割とすんなり話がついていた。

目的地は禁足地。そこに謎のモンスターが現れ周辺の生物が暴れまわっているらしい。正にシャガルマガラが覚醒した時と同じような状況が生み出され今回黒式に指名で緊急クエストが発注されたとのことらしい。

「で、実際のとこどう対処するんだ？」

「分からない」

竜車に引かれてガタゴト揺れる三人の周りには重苦しい空気が漂っていた。

相手がただのモンスターでも、古龍でもない存在と対峙するとなりどう対処すれば最善かを黒式は悩んでいた。

しかも隣に座る男の思い人となれば、いくら常に如何なる時も冷静さを欠かず狩猟に取り組んでいる自分としても引き金を引くのも躊躇われる。

「まずこれだけは言っておくけど、もしも話し合いも通じなくて理性がない状態だと分かったら躊躇わずに撃つよ」

「……っ。分かった……」

頼む、どうか無事でいてくれ。

切な願いが胸を駆け巡った。



「ハアツ……ハアツ……」

どこか分からない森の中。

纏わりつくような、自分のものではない瘴気が漂う森の中を、ふらつく足で彷徨う。

気を失ってからどれくらいの間が経過したのか分からないが、あの時は夕暮れぐらいで今の空は日の光が見えないほど暗くなっているから、完全に夜のような。

「目を跨いだか、それとも二、三時間経ったくらいかな……」

滝のように流れる汗が落ちる口元をだらしなく拭う。

そこで視界に映った妙な違和感に気が付いた。気が付いてしまった。

「……っ。進んでる」

見れば夕暮れ前までは外殻がボロボロと剥がれ落ちて白金の鱗が見えていた程度だったが、それからさらに脱皮が進んでその鱗の本性が姿を現していた。

幸いまだ右腕部までのようで、左手を見れば見慣れた黒い外装甲が展開していた。けれど妙に膨らんだ鎧に不安感を覚えてしまう。

「まだ、大丈夫」

自分の素手よりも三倍は大きい節だった掌を見ながら握りしめる。

もし今この場に彼が居れば、どれだけ安心できただろうか。

「寂しいなあ……」

近くの樹木に寄りかかり、膝を曲げて腰を落とす。

焦燥感に駆られたがむしやらの飛行と、精神の消耗でかなりのエネルギーを消費していた。

空っぽの胃に何か入れたいと思ったが、回りは知らない草木と切り立った岩盤が見えるのみで、生物が居ないように思われた。そして極めつけは空から絶え間なく、断続的に降り注ぐ大量の瓦礫。明らかに生物が居る様子は感じられない。

「お腹、空いた」

ぐぎゆるるる、と少女の小さなお腹から空腹を訴える音が鳴る。

虚ろな目は半ば閉じかけていて、何か欲しいと宙に手をかざすが当然何も掴むことは

なかった。

しかし代わりに、空腹により思考力の低下した頭が一つの刺激を察知した。

「・・・・・・・・・・？」

それは極小さな刺激であったが、意識が覚醒するには十分な量であった。

感じたのは自分のものではない瘴気。

それはさつきまで嫌気がさすほど分かっていたが、問題はそこではなく瘴気その量。

さつきまでとは確実に、流れてくる瘴気が増している。

「近くに、いるの・・・・・・・・・・？」

肌にピリピリと感じる、同胞であり、天敵である者の存在。

目に憎悪と生存の炎が灯り、身体の奥底から、臭う瘴気を垂れ流す輩を屠らんとする力が湧いてくる。

「アイツを、アイツを殺せば、この柵しがらみから抜け出せる・・・・・・・・ツ!!」

メキメキと腰のあたりから左右非対称になってしまった悍おそましい怪腕を生やし、死神のローブのような翼膜と、煌めく夜空のような翼膜を広げて思い切り地面を蹴って跳躍する。

目指すのは切り立った岩山の頂点。

真つ暗な瘴気を垂れ流す輩をこの手で消し去り、この苦痛から脱却するために。

「覚悟しなさい………アンタを倒して、私が生き残る………!!」

人としてではなく、一匹の龍としての宿命に消えかかる命を燃やし、くすんだ視界の先で唯一黒い光を放っている存在を屠らんとするために、怒りに任せて飛ぶ。

◇

ガタガタと木材と鉄材で出来た車輪で揺れていた竜車がやつと止まる。

現代技術に慣れた体には中々に辛い時間だったが、これはこれで新鮮な体験だということにしておこう。

「ん、乗り換えだよ」

「乗り換え？」

聞けば目的地は切り立った山脈の上のあたりらしい。

それならこのまま荷車で行くのも酷なので飛行船に乗って進むようだ。

目の前にはある程度の貨物を積みそうな飛行船が崖に作られた停船場所に停まっている。横のあたりから空きなんですが大丈夫なんですかこれ。

「変に暴れたりしなければ、落ちることはない、よ」

「あ、やっぱ落ちるんだ」

「私高いとこ苦手なんだけど!？」

「それはごめんなさい」

小林さんは悲鳴を上げながらもなんとか全員飛行船に乗り込んで出発した。

俺と小林さんはもしものことがあったりしたらいけないと言われて甲板には出してもらえず奥の方へ引つ込み、黒式は外で監視をしているようだ。

「何かあるかー?」

「今のところは、何も無い」

「そりゃ何よりで」

「それが問題」

「はあ?」

黒式は少し動揺したような素振りでも上空の周囲を見回している。俺も甲板に顔を覗かせて辺りを見回すが本当に何も無い。竜も鳥もモンスターも、生物の影がかけらも見当たらない。

「何か異常なのか?」

「異常、と言つていいのかな。アブナイ奴が出たら生き物は隠れる」

「なるほど」

「それにほら」

「なんだ？」

あつち、と指を差された方を見ると、そこから空の色が変わっていた。

円形に広がっている暗い紫色の空の中央は、山の頂点が埋まっていた。ゲームの設定を思い出してそんなことがあったと思う。古龍が出現するクエストには小型モンスターを含めその他のモンスターが出るのではないとか、ゴア系のモンスターが活性化した時とか空があんなことになったと思う。

もしかして。

「古龍かな」

「その通り。よく知ってたね」

「ゲームでそれとなく説明してるのみたから」

「なるほどね。っ——隠れて」

「うおっ!？」

黒式に無理やり甲板の下に頭を掴んで押し込まれて階段から足を外して下に転げ落ちてしまった。

痛みが響く後頭部を抑えながら文句を言おうと上を見上げると緊迫した表情の黒式が飛行船の外の一点を見据えて睨んでいた。

「……何か見つけたのか？」

「恐らく人じゃないモノ」

「なんだよそれ」

「君が言ってた娘、だと思っようよ」

「なに!?!」

俺自身も甲板に顔を出してもう一度周囲を見ると、遠くの上空に、小さな飛行体があるのを見つけた。

飛行物の一体も見えなかった静かな空で、おおよそあり得ないような唯一見えた一つの存在。

目を凝らしてみると、それは人の形に似ていたが、決定的に違う点がいくつも現れていた。

左右非対称な大きな翼、たなびく長い尻尾、そして頭部から生えている白金色の角。

遠目から見てそれぐらいしか分からなかったが、それだけ特徴的な部分が見えれば確実にあの存在がレシカだと言うことが分かる。

「あの娘を追ってくれないか？」

「その必要はない」

「なんで!」

「行先は多分、同じだから」

この飛行船が目指している目的地。

てんくうざん

「天空山か」

てんくうやま

「天空山だよ」

細かすぎない？

さつきまでの緊張感が途切れてすっかり気の抜けた感じになってしまった。

天空山ベースキャンプ。

簡易天幕と赤、青二種のアイテムボックスがそれぞれ一つずつ。飛行船から出た小型化船に乗り継いで、ベースキャンプにたどり着いた。目の前には岩と強靱な蔦つたで構成されたなんとも不思議な場所。一応足場がしっかりと地面から生えている所もあるが、全体としては半分くらいではないだろうか。

「物騒な所だね……」

「自然に殺されかねないですね」

少しでも足を踏み外そうものなら雲より高い上空に投げ出されてオシマイだろう。

そう思うと身震いしてしまい、足がすくんでしまう。下を見るな下を見るな。

「行先はその道の先じゃなくて、横の大門の向こう」

「こつちか」

振り向くと岩で出来た門が開かれて、そこから溢れんばかりの瘴気が吹き流れてきていた。

その先に道が続いており、この気が狂いそうな瘴気はそこから流れてきているようだ。

「この匂いは、ちょっとつらいな……」

「慣れてないとキツイからね」

黒い狩人の少女はマスクのようにマフラーを深く巻いて口元を隠し、携えてきた武器の最終チェックをしていた。弾が装填されているマガジンを詰められるだけポーチに詰め込み、武器の装填部分にマガジンをセットしてリロードをした。

「これ以上入ると生き物として危ないから、流れてるコレが収まるまでは来ないでね」

「でも……」

「でももだつてもへつたくれもないから」

黒式は俺にびしつ、と指を突き立てて指摘をしてくる。

「私の目的はこの事態を引き起こしているモンスター処理。君たちを含めたここら辺一帯の民間の命が最優先。これだけは譲れない」

「その危害を出しているのがもし、レシカだったら」

「迷わず撃つ」

「ッ……」

俯いて何も言えなくなる。

もしもレシカがこの事態を引き起こしている要因だとすれば、俺はどうするだろうか。人の命を優先して彼女を殺すだろうか。それとも彼女を引き連れて何処までも逃げようと夢を見るだろうか。

「けど、これは予想だけど、今回の騒動の原因はカノジョじゃない」

「そ、そうなのか？」

黒式は上を向いてこの空を見て。と指をさす。

「この暗雲が立ち込めているのを確認した時点で少しその可能性を見たけど、さっき飛行船でこの場所に飛んで行った女の子らしいものを見るに、原因は別だと思う」

「それってつまり……！」

「お静かに」

もしかして、と期待に胸を躍らせようとしたところで黒式に黙るように正されてしまう。

「高望みは当てが外れた時の反動が大きいから、しないほうがいいよ」

「わ、わかった」

黒式は振り向いて門へと向かう。

彼女は一度振り返ってサムズアップをして一言良い放った。

「私に任せろ」

それだけ言い残して、彼女は門の奥へと進んで行った。

◇

立ち込める暗雲、夜と言うには何故か明るくて、昼と言うには太陽の光が見えていない。そんな片道を歩きながら、黒式は考え事をしていた。

さて、どうしたものか。

細長い道を進みながら顎に手を置いて考え込む。

優先順位はクエストの達成条件である古龍の討伐だが、それとは別で女の子の回収もある。

今回、何が自分をそうさせたのか分からない。あのとき彼らが居て、彼が言う女の子の存在に興味湧いたからだろうか。

それとも自己満足ののだろうか。

全くもって度し難い。

「まあいつか」

あの時気が乗ったから、と言うことにしておこう。

自分は気分屋だから、いつだって。

そうこうしていたらもうすぐ禁足地に着く頃だ。

武器の調子は良いだろうか。

体の動きは良いだろうか。

頭の回転は良いだろうか。

「よし、行こう」

痺れるほど緊張の空気が張り積めている場所に、足を踏み入れる。

大きな円形の平地の中央に岩石が一つ突っ立っている。草木も生えていない更地に
昼間つから日も照らず、うすら寒い雰囲気が出ているこの場には自分しかないように
見えたが、岩の影に漆黒の塊が見えた。

「コイツ、か」

『グルルル……』

黒い塊が唸った。

『ゴオアアアアアアアアアア』

ツツ!!!

黒い塊が吠えると、黒い塊の表面が蠢きだして、咆哮と共にガワが弾けて中に居た存

在が顔を出した。

『オオオ……!!』

「目標確認」

臨戦態勢。

武器を抜いて銃口を標的、シャガルマガラに向けて引き金に指を添え、全身を程よく力ませて意識を切り替える。

決戦の火蓋が切って落とされた。

としたその時、

「ぐウ……アアアアアアアアアアアア——ツツツツ!!!」

上空からナニカが急速に落下してきた。

「っ!?!」

上空からの急降下で天廻龍の喉元を怪腕で叩きつけるように押さえつけて、態勢を崩して転倒した天廻龍をぐるりと引きずるように地面にこすり付けて上へと投げ飛ばす。

白金の龍は上空で体勢を立て直し、空中でびたりと止まって自分を投げ飛ばした者へ

しかし寸前で食い止められ、前足で弾かれた。

「チツ」

すぐさま飛び退いて距離を離し、両手の剣を手放してまた新たな武器を今度は地面から引きずり出した。

「傘、いや日傘？」

真つ黒でひらひらした意匠が目につくファンシーなように落ち着いている貴族が持つているような黒い傘を取り出したレシカは、柄と帆を張っている骨組みの根元を掴んで以前使用した時と同じように上下反転させながら持ち替えて、日傘はモーニングスターへと形を変えた。

「アアツ!!」

腰を落として槌の先を地面に無造作に落として、両手で掴んだまま走り出し、天廻龍の目の前でガコン! と一度跳ねさせて顔を上げて避けようとしていた天廻龍の横顔に槌を重い重低音を響かせて当てた。

『グギツ!!』

「ウー………グウー!!」

『ギアアアア!!!』

下からの突き上げで上を向いた龍の顔面に振り下ろしによる追撃で地面に槌ごと叩

きつつける。そのまま頭の上に槌を乗せて身動きを許さなかったが、剛腕で無理矢理退けられた。

そして立ち上がった瞬間に剛腕の平手が飛んできて追撃を受ける。その追撃を日傘で受けて、押し込まれるような攻撃をパリイで弾く。

「出る幕無さ過ぎ……」

そう思うほど、人間離れた二体の戦闘は一線を画すものだった。

せつかく最高の状態で持ってきたライトが無駄になってしまう。撃たないと。

「えい」

三連した破裂音と共に貫通弾を発射する。

発射された弾丸はレシカの横を通って天廻龍の左翼腕に着弾した。

『ギヤアツ!!』

「ウ?」

何故か人の言葉を発さないレシカは一度此方へ振り向き、一度警戒したが敵意を向けられていないことを知ると天廻龍へと意識を戻してまた両手に剣を持ち、顔に黒炎が上がったかと思うと両手足に装備された装備品と似通った仮面を身に着けた。

「ウウウ……!」

「共闘オツケーでいいのかな」

「オアアア!!」

レシカが飛んで斬りかかる。

ガードされようとしたところを狙撃して防ごうとした腕を弾き飛ばし、斬撃をクリーンヒットさせる。

『アアッ!』

「うお」

邪魔をされた天廻龍が私に向かってプレスを吐いたがそれを難なく回避して見せる。

続け様に撃つてその後ろのおみ足に弾痕を食い込ませて距離を置く。

撃たれた龍は踏ん張る力の四分の一か六分の一を失って一瞬の隙を晒した。そこに逃さないとばかりにレシカが直剣で突きを繰り出し、肩に当たった切先を怪腕で踏ん張りながら食い込ませて下に斬り裂く。

『ギッ!』

レシカは間髪入れずに怪腕で張り手を入れようとしたがそれを寸のところまで防がれて、重量の差で押し負けていた。空中で翼膜を使って落下の速度を落として着地しようとしたレシカに今度は天廻龍が追撃を与えてレシカが吹き飛ばされ、地面にかなりの勢いで転がっていった。

「グイッ」

「女の子!」

軋む体で起き上がろうとした少女に天廻龍はこちらに見向きもせず、一直線に少女に向かってプレスを吐き、それと同時に迫って上からその巨体を使って抑え込む。

「フ、ぐウ……………!!」

『アアアア……………!!』

瞬時に起き上がったレシカは上から被さるようにして押さえつけようとする天廻龍の腕をなんとか支えて跳ね退けようとしていたが、無理に起き上がった体勢に加えて先のダメージで力めないでいた。

「っ!」

阻止させようとしてその後ろ脚に貫通弾を撃ち込む。しかしレシカを剛腕で抱えてバックステップをされてしまい、弾丸は空を横切り、レシカは空中に投げ出されたと思えば着地する前に剛腕含めた四つ足で、加速を加えたプレスを喰らわされてしまった。

「ガハアツ!」

「——ッ!」

傍から見てもかなりの大ダメージ。

あの小さな体であの攻撃を喰らえば、大方一撃死、良くて瀕死、いや最悪か。

地面が揺れるほどの攻撃で少女をめり込みし、したり顔で振り向く天廻龍。

「・・・・・・・・つ」

『グオオ・・・・・・・・』

倒す気でいたが、先ほどの戦闘を見せられてはやる気が失せてきている。

明らかに同じ生物とは何かが違う。何かがおかしい。

それは体の構造とか身体能力とかそんな次元ではない。

ゆつくりとした足取りに少しずつ恐怖心が募ってゆく。

黒い霧が口から漏れて、全身の甲殻やら鱗の間から黒い鱗粉が溢れている。

それを見て口元を抑え、マフラーを押し当てて早まる呼吸を無理して鎮めようとする。

「く・・・・・・・・」

銃口を向ける。

しかしそれだけ。

引き金が引けない。

突破口が見えない。

どの選択肢を取ってもバッドエンドしか見えない。

「万事休すかな・・・・・・・・」

諦めようとしたその時。

「アアアアアアア……」

のそりと起き上がったレシカが黒炎で鉈を生成し、遮二無二に天廻龍へと投擲した。

『ガア!?!』

鉈は龍の背部に刺さり、龍が鉈を退けようとするが関節が回らず取れそうになかった。

あらぬ方向へ曲がっている手足がごきん、ばきん、と不快音を発しながら元に戻り、攻撃を喰らって碎けて消滅してしまった鎧をまた装備して、真つ黒な瞳と虚ろな瞳を天廻龍ただ一体に向けている。

ぞるっ、と怪腕を生やして両手を地面につけてビタンと尻尾を地面に叩きつけて唸らせる。

左右非対称の角はもはや違うのは色のみで、大きさも形状もほとんど同じと言うところ

ろまで成長、あるいは侵食していた。

その姿勢はもはやヒトと呼べるものではなく、文字通り人の皮を被った化け物であった。

「アアアアア—— ツツ!!!」

六足で跳躍し、天廻龍の虚を突いて、肩甲骨から生えている剛腕の片方の翼膜を噛み千切った。

生々しい音。

飛び散る血潮。

思わぬ身体的損傷で白金の龍が苦痛の悲鳴を上げてもがく。

その抵抗に負けじと喰らい付くレシカ。背に刺さった鉋を無理矢理引き抜いて今度は剛腕を根元から斬り落とした。

『ギアアアアアアア!!!』

あまりの苦痛に天廻龍が絶叫しながら野垂れ苦しんでいる。

地べたを這いずり、出血を堪えようとするが興奮によって血流が上昇し、さらに出血を促してしまっていた。

そこに畳みかけるようにレシカは直剣も生成して跳躍する。

そこからは目で追うのもやつとな、急速度な速さによって繰り出される野蛮な斬撃で

少女が龍をいたぶっていった。全身に深い傷を作り、尾を跳ねて、爪を折って、角を砕く。

レシカが地面に止まった時、反する龍は満身創痍で虫の息であった。

「オオオ………！」

「な、なに？」

少女は両手に持っていた剣の、鈍の切先と直剣の柄頭をぶつける。すると二振りの剣はぎぎぎ、と金属の軋む音を出しながらその形を変えて、上には二本の下には一本の弦で支えているという特異な形状の弓になった。

角の生えた髑髏のような、ゴアシリーズにもシャガルシリーズにも似ていて、それでいてどちらでもないようなデザインのは彼女専用の大きさのようで、その体軀にぴつたりだった。

少女が弦に手を置くと、黒炎が一つ彼女の手元に灯り、弦をゆつくりと弾いていくとそのまま火の灯を残したまま矢のように火が伸びて、黒く燃え滾る矢が生まれた。

ギリギリと形が臃げな矢をくべて張る弦を、その節だった手で引つ張る。

「ハアッ!!」

限界まで張った弦を離す。

炎の矢はその臃げな見た目に反して弦のしなりに応じた瞬間的な速さで天廻龍の喉

元に刺さり、そこから黒炎が広がって行き、全身が黒い炎で包まれた。

『アアアアアアアア——』

天廻龍の断末魔はだんだんと小さくなっていき、持ち上げていた首は力なく倒れ伏して、完全に命を奪い取ったからか全身を包んでいた炎が消え去って息のなくなった龍が姿を出した。

元凶が命を失ったということで不快感を覚える暗雲が晴れて空に青空が戻り、数時間ぶりに見る日差しが目を差す。

「……………」

「ひゅーっ、ひゅーっ……………」

終始やることなかった。

格好つけて来たのにこの体たらくは流石に恥ずかしい。

自分の羞恥心は置いておいて、まずは目の前の少女の対処が先だ。

敵か味方か、それとも救助対象か。

少女がふら、と振り向き、無気力ながらも少しの警戒心を乗せた視線を向けてきた。

「貴女は、何者……………」

「私はー、うん、ただのハンターだよ」

先ほどまでの戦闘で自分の中の自尊心とかそんなものが崩れて、格好つける気持ちも

なくなっていた。

トリガーのロックをして暴発防止措置を取って納め、せめて回復でもさしてあげようと近くに行くと、レシカは体を抱えて膝をついた。

「うぐツ!？」

「!？」

突然少女が短い悲鳴を上げて仰け反り、両手の剣を落として膝を折り、岩肌の手を付いて嗚咽を吐く。息の仕方を忘れたかのように呼吸が不安定になり、這い蹲つてもがき苦しみ怪腕が途切れて消滅し、黒髪と白金の髪が入り混じった生身の少女が投げ出された。

「カハアつ、ゲホ、ゲホ……!」

血反吐を吐く勢いで咳き込み、咽る。

そして全身に少しずつ起こっていた脱皮が、ここにきて急激に進んだ。

バキバキと音を立てて、全身からボロボロと外殻が剥がれ落ちて漆黒から白金へと色を変えて、真つ黒に染まっていた瞳は純白に戻り、黒髪は全て白金色に染まった。

「ハーッ……ハーッ……ハーッ……!」

咳も嗚咽も収まった彼女は荒い呼吸で立ち上がった。

その目には戦闘時の錯乱状態に似た発狂の三白眼でなく、理性の見える瞳が見えた。

この娘をどうしようかと考えていたら、一本道から二人の男女が小走りで来ているのが見えた。

「おい」

「終わったかな」

そういえば雲が晴れたら来ていいとか言ったな。

目の前の少女の介抱をしてやりたいがあの人たちも気がないだろう。

目の前に目的の少女が居るのだから。

「ッ、レシカ！」

真司が女の子、レシカの存在に気がつく。

色も形も変わってしまった、種族すらも変わってしまった彼女に、真司は迷わず彼女の名前を呼び、レシカの元に向かう。

「あはは、こんなになっちゃった……」

泣きそうになるのを必死に堪えて浮かべた笑顔。

目尻には涙が浮かんでいて、声は上擦ってしまったている。

どれだけ取り繕うとしても今のこの状況で気丈に振る舞おうとするには、今の彼女には重すぎた。

「レシカ……」

「来ないでっ!」

「おわっ!?!」

慌てて駆け寄って手を伸ばした途端、レシカが日に照らされて淡く煌めく怪腕を展開して自分を守るように、もしくははまわりを寄せ付けないようにして怪腕で壁を作った。

「私、前とこんなに変わっちゃった。もう戻れないの、だからもう傍に居たくないの……!」

「レシカ、それは」

「やめてよ、来ないでよ、近寄らないで!」

労わりも労いも悲哀も慈愛も同情すらも受け付けようとしないうレシカに、真司はただ見つめていただけだったが、怪腕で己を守るようにうづくまる少女にゆっくり、歩み寄った。

「来ないでよ、なんで来るのよ!?!」

「……」

「やだ、やだよ、また怪我させちゃうじゃん……!」

「……」

慌てふためき睨むことも蔑むことも出来ず、謝意と自責の念で板挟みになっているレシカの心境に土足で踏み上がるが如きの所要で一步、また一步と近づいていき、二人の

距離は両腕を伸ばしたほどの距離まで近づいた。

「来ないでっつて、言ってるのよ!!」

「.....」

気の迷ったレシカは美しい剣を取り出して真司に向ける。

しかし真司は歩みを止めることなく進み、剣を振ることも逃げ出すことも出来ないレシカの目の前まで来てしまった。

「くっ.....ふうッ.....うう.....!!」

「レシカ」

優しく少女の名前をもう一度呼び、両手を広げて怪腕を退け線の細い少女の体を抱きしめる。

身動きするが先の戦闘により体力の消耗も激しくそんな力は残っていないかったように、真司の力にも負けるぐらいだった。次第になけなしの抵抗も弱まっていき、手に持っていた剣もするりと抜け落ちて地面に転がって消えた。

「うぐう、シンジい.....」

「.....ああ」

様々な感情が溢れて極まったレシカは遂に両の目から涙を流し、真司の背中に手を回してひし、と掴み肩口に顔を押し当てて声を上げて泣き出した。

真司は何か言うわけでもなく、やっと見つけた彼女を抱き締めて自分も涙を流していた。

気が落ち着くまで二人で泣いて暫く。

「おかえり、レシカ」

「うん、ただいま……」

涙ゆえか、日の光が眩しかった。

エピローグ

いつもと変わらない朝。

目覚まし時計のアラームを上へ上げた手の重力でばたんと止める。

「もう少し……」

伸ばした手を布団の中に引き戻し、外気に触れて少し冷たくなった腕を労わって布団の中で暖める。

まだ眠気が覚めない。こんな時は目が冴えるまで寝るのが一番なんだ。昔からそうだ。偉い人も春の朝は眠いと言ってるくらいだしそうなんだ。

「朝よ、起きなさい」

部屋の扉が無造作に開かれて、女性の声が出た。

声の主は分かっている。寝ぼけた頭でも分かるくらいいつも聞いているのだから、当たり前だ。

「もう少しだけえ……」

「だーめ、ご飯冷めちゃうでしょ」

「んうーう……」

掛け布団をずらされてひやつとする外気が温まった体を撫でる。

ぞくりと体を縮こませるが、その小さくなつた体を声の主がぐらぐらと揺さぶつてきたので仕方なく上体を起こす。

「やつと起きた、おはよ」

「んー、おはよ」

「レシカ」

美しい白金色の長髪とそれに似合うフリルの付いたカチューシャのような飾りに、飾りの両端から小さく飛び出る二本の黒い角。

その体格は出会つたころよりも大きくなり、身長は十代か二十代の平均的な身長と同じくらいだろうか。そしてそれに釣られてか発育も良い。出るところは出ていて締まるところも締まっている。

腰のあたりから髪の色と同じ色をした細長い怪腕が伸びていて、フライパンと調理器具を握っている。尻尾も本来の物より細いモノが伸びていて、するすると揺らめいていた。

瞳だけは以前と変わらず明るい紅色で、それだけは変わらないんだと感心していた。

「どうしたのよ、そんなにじつくり見ちやって」

「いや、きれいだなーって」

働かない頭でその一言を言い放てからちよつとやらかしたかな、と思う。

証拠にレシカは顔を真っ赤にしながら「なな、な、なに言ってるのよバカっ！」と言って部屋から出て行ってしまった。

しかしすぐに扉を開けて顔を覗かせる。

「ご飯、早く食べにきなさいよ……」

可愛い。

毎日とは言わないがだいたいこんな調子なので惚気てしまってもいいだろう。

せつかくの朝食が冷めてしまってもいけないので早く身支度してテーブルの席に着く。

「やっときた」

「ああ、ごめん」

エプロン姿のレシカがまだほんのりと赤い顔で頬杖を突いて待ってくれていた。

自分も座って目の前に用意されている料理に手を付けようとしてレシカに叩き落とされた。

「いただきますがまだでしょう」

「ゴメンナサイ」

結構目力強めに言われて尻込みしながら謝る。

「分かったなら良し」と力んだ力を緩めてテールブルに乗せ上げていた上体を下ろして、二人揃って手を合わせる。

「いただきます」

黙々と食べ進め、半ば口に運んだところで本日の予定を改めて見直す。

最近引き受けていた仕事が一段落したので納品と報告、その他諸々で今日は会社に行く。

「今日はどうするの?」

「ちよつと出かける」

「ん、わかった」

最後の一口を口に運んで手を合わせる。

「ごちそうさま」

「うん」

レシカはまだ食べている。自分は洗面所で歯磨きやら髪を整えたりした後、部屋に戻って身支度をして荷物をもとめ、玄関に向かう。

「じゃ、行ってきます」

「あ、ちよつと待って」

リビングの方でレシカが制止の声をかけるので止まると、彼女がパタパタと走ってきた。

なんだろうと思っていると、するりと首に手を回されてぎゅう、と抱き締められた。

「ん」

「んふー」

半目で向けられた微笑みはまさに女神のそれのような錯覚に陥ってしまう。朝日の日差しも相まってまさにそれだった。

それほどまでに彼女は美しく、優しく、なにより愛おしかった。

「うふふ」

「楽しそうだな……」

スキンシップは相変わらずのようで、たまにこういうことが良くある。

以前から変わらない彼女のこの癖に、遅いとは思うがやつと慣れ始めてきた。

「ああそれと」

「なに？」

ふふ、と笑うレシカは少し頬を染めて、また手を伸ばしたと思うと今度は顔をしっかりとホールドして、細めた唇を俺の口に当てた。

「んっ」

数秒そのまま動けず、振りほどくことも出来なかつた。そもそもやる理由もないか。あつと言う間の数秒で離れた唇は何だか火照っていた。

「いってらしゃい」

「ああ、行つてきます」

振られた左手には、その煌めく長髪にも負けないほどの輝きを放つ指輪が填められていた。

番外編

リアル季節番外編 慣れないイタズラ

買い物からの帰り道、近くに寄ったコンビニで催し物の飾りや旗が見えたのでよく見たらどうしたらハロウインのものだった。

そうか、もうそんな時期なのか。

レシカになんか上げようかな。

そう思い立ってコンビニの中で適当にお菓子を掻い摘んで自宅に帰った。

「ただいまー」

「おかえりなさ．．．．あ、と、トリックオアトリート！ お菓子をくれてもイタズ

ラするぞー！ で、あつてる？」

「慈悲は無いのか」

まさか帰宅早々追剥ぎにあうとは。

「はいお菓子」

「えっ、いいの？」

「それ食べていいからトリックは勘弁な」

「う、うん……」

大人しくお菓子を受け取ったレシカは何故か複雑そうな顔をしていた。

「いたずら、しなかったのに……」

「何か言ったか？」

「いいえ、何でもないわよ」

「んん？」

レシカは拗ねた感じで部屋に戻っていった。

何か不満だったのだろうか？

まあ回避されたらそれら面白くはないのかな。

やらかしたかなあ……

着替えるとソファアの上に体操座りで鎮座する黒いロリータ娘がいた。

不機嫌そうにお菓子を頬張っているが、その丁度良い甘さに逐一しかめっ面を綻ばせながらもまたすぐに険しい顔に戻っている。忙しないな。

「なあ機嫌直してくれよ」

「別にー、機嫌悪くなんかないし」

「メツチャ悪いじゃんか」

「ふんっ」

許してなるものかと言うオーラが言葉はなくともひしひしと伝わってきているので近づきたい。

どうしたもんか………。

どうやって謝ろうと考えていると、「ねえ」と呼ばれたのですぐに返事をする。

「謝りたいなら、私にイタズラしなさいよ」

「どうしてそうなる」

「イタズラしそびれて機嫌悪いのよこっちは！　じゃあアナタが私にやってよ！」

「なんとということんでも理論」

しあしそれでも拒むおれに苛立ち始めたレシカはハツとなつて何か考えだした。

そして先ほどまでのしかめっ面から打つて変わつてにまりとした笑みになった。

「私言つたよね？」

「ん？」

不敵な笑みとオーラを纏いながらゆっくりと視線をこちらに持つてくるレシカ。

嫌な予感しかしない。

「お菓子をくれてもイタズラするって」

「いやそれは勘弁って」

「問答無用よ♪」

「ギャー」

ソファアに座っていたら横からお押し倒されてしまい、仰向けになつた俺の上にレシカが覆いかぶさるように重なるという構図。

このまま俺は何をされてしまうのだろうか？

こそばしならまだ我慢も出来るが、レシカのことだから妙に艶めかしいこととかしてくるんじゃないだろうか？ それは偏見というやつかな。

諦めてされるがままにして力を抜いて目を閉じる。

さあやるなら今のうちだ、なんでもこい………。

だがいくら待ってもあるのは布越しに伝わる華奢で柔らかい感触と上着を握られて首元が少し窮屈になる感触のみ。

目を開けて様子を見ると、羞恥心で顔を真っ赤にして動かないレシカの姿があつた。

「恥ずかしいならそこまでして見栄を張らんでも………」

「な、ぶ、別にいいでしょッ!？」

「ちよつと囁んだらろ」

「囁んれないあよ!」

「呂律ろれつ」

早口になつていつて全然回つていなかつたぞ。

耳まで赤くして胸に顔をうずめて呻きながら消沈してしまわれた。

「ううく……」

「あらら」

これじゃあ悪戯は難しいかな。

I Fな番外 夏のビーチに黒蝕竜姫

夏真っ盛りのこの頃、一人（？）の竜の少女はだらしなくソファアに項垂れて冷房の風を全身に浴びていた。

現代社会に馴染み込み過ぎではないだろうか。とも思うが、彼女の火や熱に対する耐性の弱さを鑑みればああなってしまうのも分かる気がする。

「ねえシンジい、何か冷たいモノとかなーい？」

「アイスならあるけど」

「ちよーだい〜」

「はいはい」

ソファアの肘掛けから頭を逆さに垂らし、舌を少し出して「入れてください」と言わんばかりにだらしなく待ち構えるレシカに、劣情こそ抱くが夏の暑さに燃え尽きる。

俺は冷凍庫からアイスキャンデーを二本、取り出して袋を向き、片方を雛のように口を開けて待ち構えているレシカの口に突っ込んでやる。

「あむあむ……」

「お行儀悪いからちやんと座って食え」

「はあくい?？」

アイスを啜えたままもごもごと返事をしたレシカは溶けそうなほどに横にしていた体を起こしてきちんと座る。

それにしても暑い。冷房を点けているとは言え、外は猛暑が続いて外出すら億劫だ。

「海にでも行きたいところだがなあ?？」

「外とか絶対イヤ」

「これだもんなあ。」

そんなとき、スマホに電話が入る。取り出して画面を見ると、そこには小林さんの名前が表示されている。

はて、仕事は送ったはずだが。

何にせよ出てみないと用件は分からない。

「はい」

『やあ村瀬君、元気かい?』

「この季節に元気な奴はいないでしょう」

『それもそうか、ははは』

彼女はそれはそうと、と続いて本題を持ってくる。

『ところで今度の日曜、海に行かないかい?』

「海」

このところ暑さも増して煮えてしまいそうだったので、この提案には流石に反応せざるを得なかった。

振り向けばソファアにだらしなく項垂れながらアイスをもごもご啜えているレシカ。俺は受話器を持ち直して、正した姿勢で勢いよく答える。

「是非とも同行させてください」

『よし、決定！』

受話器の向こうで元気な女性の声が響いていた。

浜辺近くの公道。

小林さんの車に揺らされ、日照りが強い中開けた窓から差し込める風を受け、涼を取っているレシカをバックミラー越しに眺めながら、先日はいぎこぎを思い出す。



「行くこうつて！」

「ぜえええつつつたいに行かないからッ！」

頑なに外出を拒む彼女を必死に説得していた。

いつからこんなにインドアに目覚めたのか。

確かに近年の夏場は酷暑も温いと言わんばかりの気温で、火耐性皆無も通り越してマインナスにめり込んでいるほどの彼女の体では、外に出るのも困難なのは分かる。

しかし、だからといって家に籠りきりでは体に良くないし、何より電気代というのが幾分怖い。

「なんでこんな暑い外に好き好んで出ていかなきゃいけないのよ!」

「いやだって、折角のお誘いな訳だし、それに海楽しいだろうから」

「あの女ね。私よりあの女を優先するのね!」

うわめんどくせえ。

何処からそんなメンヘラ染みた台詞覚えてきたんだよ。

額に浮いてきた青筋を抑えて、どう説得しようか悩む。

お、そうだ。

「そうか、レシカは来てくれないのか?」

「?!何よ」

黒髪の彼女に背を向けて、如何にもと言わんばかりの演技をし始めるシンジ。

「レシカの水着、見たかったんだがなあ?」

「は、はあ?」

そう、水着。

それは男のロマンでもある。

更衣室の、プールの、海の!

様々なシチュエーションに置かれる水着と言う存在は、世の男性の心を掴み、虜にしてきた。

更に、水着は種類を増し、学校の青春時代から成人してからの夏のビーチに至るまで、多種多様な環境に適応してきたのだ! スクール水着からビキニまで。子供から大人まで、そのときめきを水着は与えてきたのだ!

「そんなの、今すぐにでも、その??み、見せてあげるわよ」

そう言つてレシカは着ていた黒いフリルのついたミニワンピースに手を添えて、得意の形態変化を応用して服の形状を変えようとした。

だがシンジはそれを良しとしなかった。

「待つてくれレシカ!」

「きやあつ!? な、なによ!」

飛び付くように肩を掴まれ、無理矢理に制止されたレシカは心臓を跳ねさせて形態変化を止めた。

強い力で掴まれているが、さほど痛くもないうえ寧ろ 間近で触れられていると言う状況の方が、とても心臓に悪かった。

「部屋で水着を眺めたところでそんなのただのコスプレ撮影なんだ」

「へ？」

「夏の、季節が絡んでいるときだからこそ輝くものだってあるんだ……！」

「何を言ってる」

「今の君の水着は、夏の浜辺だからこそ輝けるんだッ!!」

「わかった、わかったからちよつと離れてえっ！」

だんだんと顔を近づけられながら力説されては折れるしかない。やっと肩から手を離してくれたシンジは、必死の説得もと基性癩の暴露にも受け取れるような力説が通じたと思ひ、ガッツポーズをきめている。

当のレシカは床に手をつき、胸にもう片方の手を当てて乱れる呼吸を必死に抑えていた。



山を通り抜けて暫く平坦な道を進むと、片側が拓けて目を刺すほどの日差しとさざ波

をたてる鮮やかな海。賑わう人の喧騒が聞こえてくる。

「よし、着いたよ」

「おお〜！」

止められた車内から降りれば蒸すような暑さと、海から吹く潮の匂いを乗せた瑞々しいひんやりとした風が全身を撫でる。

「どうだレシカ、海だぞ」

「凄い、広い??」

俺が知る限り、初めて目にするであろう海と言う存在を前にして、レシカは感極まったと言いたげな表情で目の前の巨大な海面を眺めていた。

被っていた大きな麦わら帽子のつばを握り、靡く風に飛ばされないようしっかりと、放さないように握るレシカの姿は、純粋な少女そのものだった。

「先が見えないのね」

「おお、海は広いと言うからな」

歩み寄って麦わら帽子の上に手を置く。

レシカは俺の影に隠れ、裾を握ってきたが、目線は目の前の海に釘付けであった。

「怖いのか?」

「うん、怖い」

巨大過ぎる存在を目の当たりにし、無力感からか諦めたような声を出すレシカ。しかし裾をつかむ手には力が抜けるような気配はなく、寧ろより強く握ってきた。

「けど、アナタが居るから怖さも少ないわ」

「そっかそっか」

密着した距離感に安心するのは依存なのか、それとも信頼の証か、それでも一緒に居たいと思うのは悪い事ではないと信じたい。

「おーい二人ともー。荷物出すの手伝ってー!」

「あ、わかりましたー」

「待ってよー!」

呼ばれて振り向けば車からパラソルやらシートやらを出している小林さんがいたので、早々に駆け寄って荷出しを手伝う。



少々多かつた荷物も出し終え、パラソルの日陰で休む俺達。

小林さんは「酒でも飲みたいけど、無理かなあ」と愚痴りながら、クーラーボックスから取り出した缶飲料を開けて煽っていた。

「私は暫く休むから、二人は遊んでおいで」

「では、行つてきます」

レシカの手を優しく持つてそのまま海に、とはいかず、先ずは更衣室に連れていった。

「一先ず水着に着替えるか。泳ぐし」

「いちいち脱いだり着たりするのつて、めんどくさいわね。人は」

「そんな台詞はニートかケモノの言うことぞ」

「ぶつわよ」

「ごめんなさい」

痴話話もそこそこに、男女それぞれで別けられた更衣室に入り、露出面積が増えた格好にそれぞれ変えて出てきた。

シンジはチノパンの水着で、ビーチサンダルを着用。無難なところを行きすぎて影が薄い気がするが、機能性と目立たないことが目的なのでこれで十分だった。

「レシカー、終わったか？」

「う、うん」

呼び掛けに答えたのは歯切れの悪い返事。

どうしたのかと首をかしげるが出てこなければ状況などは予測すら出来ないので扉の前で待つ。

するとやつと出てきたレシカの姿に、言葉も出ることなくシンジは直立不動で見惚れた。

「ど、どう、かしら?」

「ふ」

さつき持っていた麦わら帽子を目深にかぶり、つばで顔を隠しているレシカ。水着は黒のビキニで、濃い紫色のフリルのがあしらわれていた。

片方の股にはリボンが巻かれており、可憐さに一役買っていた。上底のサンダルは恐ろしく長い紐が脛まで伸びており、彼女がよく履いているブーツのイメージをサンダルに置き換えたようだった。

「見様見真似で作ってみたけど、変じゃ、ないかしら?」

不安げな声を漏らすレシカ。人前で下着にも近いほどの露出をするのが途轍もなく恥ずかしかった。

「そんなことない。似合ってるぞ」

「う、うん。ありがと」

◆ 着替え終わった二人は、そのまま海へと向かった。

「沖に行かなきゃ大丈夫だから、早く入ろう」

「うん、わかつてる、けど?」

波打ち際で、少女の手を取りながらゆつくりと海に足を沈めていく。

水着になったことでさらけ出された上半身が少し熱を持ち出した。と言うところでようやくさざ波が足首を濡らしてきた。それがとても心地よい。

「ちゃんと手は持つてるから」

「うん……」

両手をひしと持ち、小鹿のように震えるレシカ。への時に曲げた唇を噛みしめ、半ば飛び込むようにして、初めての海に足を浸ける。

「ひやつ、冷たい!」

弁慶が半分ほど漬かるまで海に入り、そこで海面から足を出したり入れたりを繰り返す。ばちやばちやと小さな水飛沫が海面を跳ねて、彼女の足を濡らす。

「まだ手持つててね」

「おう」

レシカはそのままゆつくりと進んでいきながら、温度や匂い、色や音を、五感で感じてる。足の付根に揺れる海面が当たるぐらいまで進み、歩みを一度止める。

海水を手で掬いながら、レシカは色々短い感想を述べていった。

「変に生臭いのね」

「それが磯の匂いつてやつだよ」

「それに冷たい」

「海は熱されにくいからな、冷たさからこの時期人がよく来る」

「あと案外ベタベタする」

「天然の塩水だし、当然だわな」

乾けばベタベタするが、そんなもの遊んでいるうちは気にしても仕方ないので気に止めないのが通例だろう。ある程度確かめるのも終わったところで、遊ぶ他あるまい。

俺はレシカの手を引いて彼女の態勢を意図的に崩す。いつもならかのじよのもつ怪力で動くどころか逆に張り倒されそうだが、海で、しかも骨盤辺りまで浸かっていることも相まって体幹など無いに等しい彼女は簡単にこちら側に倒れた。

「それっ」と

「きやあつ!?!」

ジャボンと大きく一飛沫。

俺も一緒に倒れたが、まあ想定内なので海水を飲まないようにしてれば大丈夫。

「~~~~~っ!!」

「ありや」

対してレシカは、虚を突かれてしまったため、慌てて立ち上がるようにするが中々足がつかない様子。仕方ないので脇に手を入れて引き上げてやる。

「?!ぶはあつ! な、なな、なにすんのよお!」

「いやあ、驚かそうと思つて」

「驚くにきまつてんでしょ! うええ、しよっぱい?!」

うむ、満足。

ニヤニヤしながら仁王立ちで満足していると、それが面白くなかったのかレシカはしかめっ面で睨んでくる。

「何かね海初心者君」

「マウント取つた気分でイイ気になってたら、大間違いなんだから!」

「うぼっ」

そう言いながら彼女は尻尾を生やして回転して飛沫を飛ばしてきた。諸に顔面に喰らつて目を負傷する。

「うおおおおお?!目が、目がああああ」

「いい気味ね」

軽く腕組をして見下すレシカ。

二人はそのままヒートアップして、水掛け合いに発展していった。

その様子を遠くから眺める小林。

「若いねえ」

謎の貫禄を生んでいた。

引つ掻けあいも一息ついて、随分と走り泳ぎを繰り返して最初に立っていたところから結構遠いところまで来てしまった。

「よく逃げたわね」

「そりゃああんなもん出されりや逃げますわ」

途中自棄になったレシカが鉈を取り出した辺りで生半可に走っていれば刺されると
思い、泳いで沖に逃げた。

レシカも負けじと沖に出ようとするが、泳ぎ方なんぞ教えてもないし知らないので、
深みにはまって溺れそうになっていたのを引き上げたりと、まあ色々。

「お腹空いた〜」

「こう言う海水浴場には大体海の家とかがあったり??見つけた、あれだ」

「何それ」

「飲食店だよ」

「へえ」

泳いだ後の空腹に、焼きそば等の香ばしい香りが食欲をそそる。ポケットから濡れた小銭入れを取り出してかろうじて無事な硬貨を数えると、人数分は買えそうだったので店に入った。

「いらつしやい！」

「焼きそば三つ、持ち帰りです」

「毎度あり！」

活力溢れる男性店員が鉄板の上の麺を混ぜつつ、注文を受けてからパックに焼けたがった焼きそばを詰めていく。

「お嬢ちゃん可愛いね！　これ、おまけしとくね」

「あ、ありがとうございます」

そう言つて店員はレシカに塩飴を渡していた。おまけと言うか予防じゃないのかそれ。

そしてパック詰め焼きそばを手渡されるとき、店員に小さく耳打ちされる。

「姪っ子かい？」

「そんなもんです」

「手は出すなよ」

「うるせえ」

引つたくるよう受け取り、にんまりと笑う店員を軽く睨みながら店を出た。

「何か言われたの？」

「なんでもない」

「??シンジならいいんだけど」

「それ以上はいけない」

小走りに小林さんが待っていた初期位置に戻り、三人で焼きそばをつついた。レシカはいつも通りに猫舌を発動してそれはそれは丹念に冷ましていた。

「彼女はいつもこんな感じなのかい？」

「そうですね。猫舌のくせに熱いもの食べようとするからいつもああなってます」

「あつっ！ な、なによ！」

「なんでもない」

「あはは」

三人と少ない人数で日陰に座り、焼きそばをつつくと言うのは静かではあったが、意外と寂しいものでもなかった。小さな会話に花を咲かせ、食べ終わると出していた荷物を車に片付けて、今度は腹ごなしに浜辺を散歩しに行った。

「私も遊んでおきたいからね」

「ビーチバレー大会とかあるんですかね」

「こういうところは何か催しがあったりしても??お、みつけた!」

何かを見つけたらしい小林さんが、いつもの三倍ほど乗り気なテンションで催し物をやっているらしい会場の方へ駆け寄っていった。レシカと追いかけて近くを見てみると、砂浜の上にネットを張って、男女関係なくチーム分けをされた二チームがバレーをしていた。

「おぉー、やってんねえ〜」

「すっげえ」

「ふーん」

レシーブで上がったビーチボールを、砂浜という良いとは言えない足場から高く飛翔して相手コートに打ち込む様は、見ていて爽快感があった。

そこでゲームセットだったのか、チームの入れ替えが行われる。

「ん? あれは」

ふと目についた一人の選手。

黒に赤のラインが入り、左右には雄々しい角が二本。目元を隠すマスクをつけた、深い褐色肌の少女が立っていた。

口元は笑ってはいなかったが、何処と無く楽しそうに見えた。

試合が始まって、ボールがうち上がる。

かと思えば褐色娘によって怒濤の勢いでスパイクが決められ、あっという間に試合が終了した。

「村瀬君！ あのガングロの娘凄いやー！」

「小林さんなんか激しいですね」

「見えない〜！」

猫のようにしなやかな動きで相手チームからのボールを受け止め、すかさず仲間のトスで上がった球を速攻で打ち返す様は無慈悲なほど圧巻だった。

「目標、達成」

「クロちゃんつよおーい！」

仮面をつけているというのに分かりやすいどや顔でコートを出る褐色娘に称賛の嵐が降り注ぐ。小林さんもいつもより高いテンションで諸手をあげていた。

あまりの熱狂具合に人波でレシカが流されそうになっていたので、早々に立ち去った。

その後、日も傾きはじめて海水浴場から離れる人がちらほら出てきた時間帯。

思いうと言えるものは出来たかもしれない。それでも物足りないと感じるのは嬉しくもあり、寂しくもあった。

「どうする、まだ残るかい?」

帰宅組を見ながら小林さんがレシカに尋ねる。

少し考えた末、レシカはもうちよつと遊びたいと答えた。その答えに小林さんは静かに頷き、こちらに向きながらレシカの背中を押してやった。

「行つておいで。私は先に車で待つてるよ」

「ありがとうございます」

小走りに寄つてきたレシカに引き連られて、海辺を宛もなく歩く。

会話はない。

ゆつたりとしたさざ波の音が繰り返され、夕焼けになり始めた日の光が横顔を照らす。

「今日は楽しかったか」

「うん」

短い言葉。

返された返事はくたびれていたものだったが、満足げな気持ちで載せられていた気がした。

「また来れたらいいな」

「そうね」

立ち止まって、海に沈んでいく太陽を眺める。

するとレシカが不意に手を絡ませてきた。

「ん?」

「握って」

「うん」

断る理由もない。俺はレシカの小さな手を握り返してやる。海で遊んで潮気でベタつくのも気にならない。濡れたあとに風に晒され、多少体温が落ち込んだらしい。

それでも彼女の掌は暖かく感じた。

おまけ 設定とか没案とか諸々

ゴア娘の初期案。

マンシヨンに住む主人公。その隣の部屋に突然越してきたのは母子家庭の怪物一家。
シャガルの母。ゴアの姉。渾沌ゴアの妹。

主人公と怪物娘三匹によるちよつと不思議なお隣付き合い……と言う妄想。

「ふふ。今後ともよろしくお願ひいたします」

「??よろしくね、お兄さん」

「ふん、封じられた我が片翼の前に平伏すが??いたたたお姉ちゃん痛い!」

世界観としては人と亜人が暮らすような世界。もしくは亜人が隠れて暮らすような世界をイメージしてました。

主人公より背が高く、グラマラスなシャガル母は結婚相手を募集中なようで、合コンや街コンでモテはするものの、二児の母はそこそ重いと言うことで結局お持ち帰りはされない。御近所付き合いと表して主人公に色目を使う。

身長186cm

B90 W64 H94

腰まである白金色の長髪を後ろで三つ編みにして垂らしている。

プリーツスカートやワンピースなど、ロングスカートが良く似合う。

笑顔が素敵だが赤い瞳を縦に裂いて見開き主人公を見つめる様は肉食獣が獲物を狙うような目つきに変わる。

お仕事は清掃員。実は別で違う仕事もしており、そっちがメインらしいが何の仕事かは誰も知らない。

設定は完成版とでほとんど差異はないゴア娘。初期案のほうが背が高い。胸もそこそ大きかった。

高校に通うゴア姉はオトナの男性に憧れを抱く年頃

で、初々しくも遊んでる感を出しながら主人公に言い寄るが、結局子供扱いされて膨れている。

渾沌妹は絶賛中二病発症中で、黒髪に金のメッシュ、眼帯、包帯とチェーンと気合が入っているものの、メッシュに見える髪は地毛で眼帯も素でオッドアイなのを気にしてつけているだけなので、半分くらいはノリでやっている。主人公に好意を寄せてはい

るが、話し相手になってくれるから懐いたという少し寂しいやつ。

シャガルは成体だから母役で決まっていたんですが、ゴアと渾沌どっちが姉かで一人で揉めてました。成体に近い渾沌が、いやあれは成り損ないでドジっ娘だから妹になるかも、通常個体のほうが姉じゃないか。と色々つらつら考えてました。

ただ、あまり原作及び公式の品から逸脱するのも如何なものかと自分なりに考慮してみても、ゴアオンリーとなりました。

まあ、このようなものを書いている時点で原作蔑ろにする寸前までやってるんじゃないかなと思う節もありますが、ここはハーメルン。まだ興に乗れる可愛いと呼べる程度と
言うことで。

二つ目の案は渾沌がいない母子二人の家族構成で、一の案と似たような設定。

おおよそ何も変わりませんがゴア娘の成長をする過程で母親がどうにも弊害になりにかねないという、後が面倒になりそうだったので没。

三の案で結局ゴア娘の一人だけになり、全話を通して初期案で作ったキャライメージを出そうという結論に至りました。

キャラ設定としては初期案の時点では真面目なまとめ約の立ち位置でしつかりものというキャラクターでしたが、フィギュアの顔パーツからの印象とは違っていたのでこれは没に。

真面目っ娘ではなくちよつと遊んでそうな娘にもしたかったんですが、フィギュアのドレスモードも汲み取りたかったので最初は大人しく、しかしいたずらっ子みたいな性格のわがまま娘になりました。

本編で書いた方のゴア娘、最後の方はもうどうにでもなれと言う気持ちが強くて、最後異世界に行つてシャガルと対決したのは最初全く考えてませんでした。

レシカがシャガルに成長するなら別に異世界に行かなくても反抗期とか感情が不安定で、とかでしめれば楽ではあったんですが、如何せん話の緩急がないかなと思ひ、あのような結果になった次第です。

最後にシャガルになったレシカが出てきますが、初期案の母親キャラよりグラマラスな体型ではないです。

身長も中学生くらいからせいぜい主人公より少し低いくらいまでは大きくなりませんが、それ以上の成長はないかと思われれます。

最後の鎧

発想元のAGPではブーツとか履いてカッコよくなつたので、全身装甲を着てもいいのではと思いついて終盤戦でさらっと書きましたが、どれだけの人に注目されてるのかわかりませんが。

装甲のイメージはゲームでのゴアシリーズに近く、全身がインナーで隠れるような赤い装備のもので、前にせり出た二本角があるフルフェイスマスクを着けた仕様を想定してました。

武器はゲームの武器全般＋フィギュアの傘と双剣を使う。

急遽作った設定だったので全身鎧に関してあまり詳しい情報は設けていません。

登場人物

ゴア娘

黒姫（くろき） レシカ。

元はファイギュアで作品の都合いろいろあつて実体化。

ワガママで自分勝手な性格だが寂しがり屋で甘えん坊。

ゴアの火耐性の脆さから暑がり猫舌、しかし好物は初めて食べたカップラーメン。身に付けている物は可変式でミニワンピースだったりドレスだったり、はたまた鎧甲胃にも姿形を変えられる。

武装も一緒だがファイギュアの標準武器以外は消耗が激しくすぐにお腹が減る。

読者の方々に名前を募ったところ色んなご意見をいただき、それらを統合しながら自分なりに組み換えて名付けた名前は今でも覚えています。

主人公

成人済み。職種は不明。何事も楽しみつつ深みにははまらない、浅く広くをモットーに丁寧遊ぶことが矜持。

インドアな趣味が多く運動不足がいなめない。

平均より少し高い身長、中肉中背でギリギリ不健康にならない程度の健康管理を心掛けています。

初期案からの変更は特になし。

キリンちゃんの主人公が学生だったので、此方では成人男性にしてキャラクターの差別化を図りました。

小林さん

カラカラ笑う女性。ドラゴンのメイドはいない。

主人公の上司的な立場の人で皆の相談役。

主人公を社会人として描写するために出したようなキャラクターなので特にこれと言った設定はありません。

黒式

設定は省略。

キリンちゃんから登場。

出すかどうか寸前まで悩みました。

レシカの脱皮を考えるとどうしてもシャガルを討たなくてはいけなくなり、それに伴いレシカの世界移動、列びに主人公がレシカを追跡をするための手段としての登場で、彼女がキーというより彼女の所持物が必要だっただけ。

シャガールマガラ

やられ役。

本当に申し訳なかった。

番外編 黒触竜姫に嘘ついてみたかった

四月一日。

多宗教肯定派のこの国では宗教入り乱れてどんなデタラメも吐き散らかしている日となっている。

諸説あり起源がどんなものかは定かではないが全国至るところで企業素人関わり無く色んな人が加減は知らないが色んな嘘を吐いている。

こんなことを言っているのだから俺もこの文化について理解はあるが、レシカはどうだろうか。

出生出身は不明、文化圏は何処に属するのか全くもって分からない上彼女が知らないことが未だに多いのも事実。

ならば試しに嘘ついてみようかしら。

「今日はでかけるのー?」

丁度いいところにレシカがきた。

さて何を言っやろうか。

「そういえば、あのねシンジ」

「なんだ？」

なんだろうか、洗剤か何か切れたのだろうか。

急務ではないが日用品はすぐに補充しなければいけないし買い物でもいこうか。

「その……出来ちゃったの」

「」

思わず固まってしまった。

なんだろうか。お菓子かなにかだろうか。

最近はお菓子作りにハマってたみたいだしきつとそうだ、そうにちがいない。

「なにが？」

「私とあなたの子供」

「」

フウー。

うそだろ。

まだちよつとしかやってないんだぞ。

ちやんとゴム着けたんだぞ。

それでも出来る場合だつてあるが、まさかこんな。

「もうすぐ産まれそうなの」

「フアッ」

十月十日もすつ飛ばしてもう臨月だと。

早すぎるにも程があるだろう。

「ううっ!」

「レシカッ!」

急に産気付きだしたレシカはお腹を抱えてその場に踞る。

彼女を介抱してやりたいが救急車を呼ぶべきか、それともタクシーなのか、スマホを抱えてあたふたしているとかろうと硬いものが落ちる音がして、レシカの方を向くと彼女のスカートの下から大振りな卵が転がっていた。

「はあ、はあ、産まれた……」

「たま」

排卵性だったのかよ。

いやしかし彼女も童ではあるし、爬虫類も兼ねてるなら卵の一つ産むのか。生態が全くもって分からないのでよく分からないが、それでも無事に産まれたのなら良しとする

べきか。

「俺たち、もうそんなに進んでたっけ」

「想像妊娠よ」

「マジかよ」

そんな文鳥みたいなこと出来るのかよ。

鶏のような品種改良を施した鳥ならともかく、爬虫類は想像妊娠なんてするのか？

それとも彼女だから出来たことなのだろうか。

ここまで展開が早すぎて理解が追い付かない。

と言うかこの卵は暖めるべきなのか、わからない……。

「さて、無事に産まれたしご飯にしましょー！」

「さっき出産したばかりなんだし安静にしておいた方が……」

「大丈夫よ。大きなお産じゃなかったし全然平気」

ふわ、と笑う彼女のの前では何も言えず、卓に食器を並べて待つ。

「さ、できたわよ」

「随分豪華だな」

オムレツ、たまごスープ、だし巻き卵、スクランブルエッグにポテトサラダ、フレン

チトースト。

「たまご料理ばっかじゃねえか！」

「新鮮なたまごが手に入ったんだもの、そりやそうよ」

「おい待てさつきお前が産んだやつじゃないだろうな！」

「それしかないじゃない」

「オオイ！」

なんてことしやがる!!

仮にも自分が産んだたまごだろうに！

「因に嘘よ」

「チクシヨウ嵌められた!!」

騙そうとしたら騙された、なんと狡猾なことか。

「でも一つだけほんとの事があるの」

「なに」

嬉しそうににまにましているレシカに訝しいと言う意の視線をぶつけながら彼女の言葉を待つ。

「出来たのは本当よ」

「マジかよ」

なんてこつたい。

「嘘よ」

「アアアアアアアア!!」

あまり調子に乗っていると、わからせるぞ……。

「だから、出来るまで頑張りましょう?」

「お、おう……」

レシカには敵わない。

そう思った一日だった。

番外編 レシカとポツキーゲーム

晩秋も寒空が広がり始めたこの頃、外へ行くにもコートを羽織る季節にイマドキの若者はチヨコにまみれた棒菓子をやたらめつたら買い漁り、恋人友達その他色々楽しくキヤツキヤウフフなことを企んでいるとかいえないとか。

それもこれもお菓子メーカーの陰謀であり、ただの日付に因んだ陰キャ、独り身、コミュ症、行き遅れの悲しい者共に対するあてつけのようなこの日を未だ快く思えないのは俺自身が捻くれているからだろうか。

「ただいまー」

「おかえりなさい」

夕暮れを過ぎたことに帰宅し、コートと鞆を妻に預けてソファアに腰を下ろす。

まあそんな事を知人友人にぼやこうものなら『嫁がいる分際でそんなこと言うぐらいならち○こもげろカス』ぐらい言われそうだが、それでも本能的な何か抵抗して、未だにキス程度にドキドキする。

「今日もお疲れ様」

「ほんとな。今日はやたらと、世間が浮かれててな」

見せつけられているような、誘われているような。そんな空気があちこちで漂うこの日はいつになってもいくつになっても慣れる気がしない。

「お菓子が売れるならいいじゃない」

「そうは言うが、だいたいポッキーゲームなんてキスしたい口実じゃないのか？」

「それでもしないと伝えられない気持ちもあるんでしょ」

そういうものなのか。

レシカとは出会いから成就まで、経緯すべてが特殊な経歴を積んでいるので何分普通がわからない。

つまるところ独身だった俺はいつの間にかリア充の仲間入りを果たしていた、ということになる。

そうなるのと恋愛過程のイチヤイチャするようなどころが少ないので、こういう甘酸っぱい雰囲気とでも言えればいいのか、そんな男女間の行いに疎いのもうなずける。

「御法度とは言わないが、ハレンチだなとも思うがなあ」

「そんなに、嫌なの……？」

何故か声音が落ちていくレシカの方を見ると、手には赤い例の棒菓子を持って上目遣いにこちらを潤んだ瞳で睨んでくる。

「あ、いや……」

「私とポッキーゲーム、しないの……？」

紅の双眸で睨みながら、震える手で棒菓子を啜えながらずいと寄せてくるレシカは俺の方をしっかりと掴み、逃すまいと退路を断つ。

「し、します」

「ほあ、はえあはいお……」

観念して棒菓子の先端を啜えた俺は、そのままコリコリと食べ進められるチョコの導火線と熱い熱い火花のように赤くなったレシカの顔を眺めることしか許されなかった。

緊張して味なんてわからなかった。

まあ、レモンの味がした、とでも言っておこう。